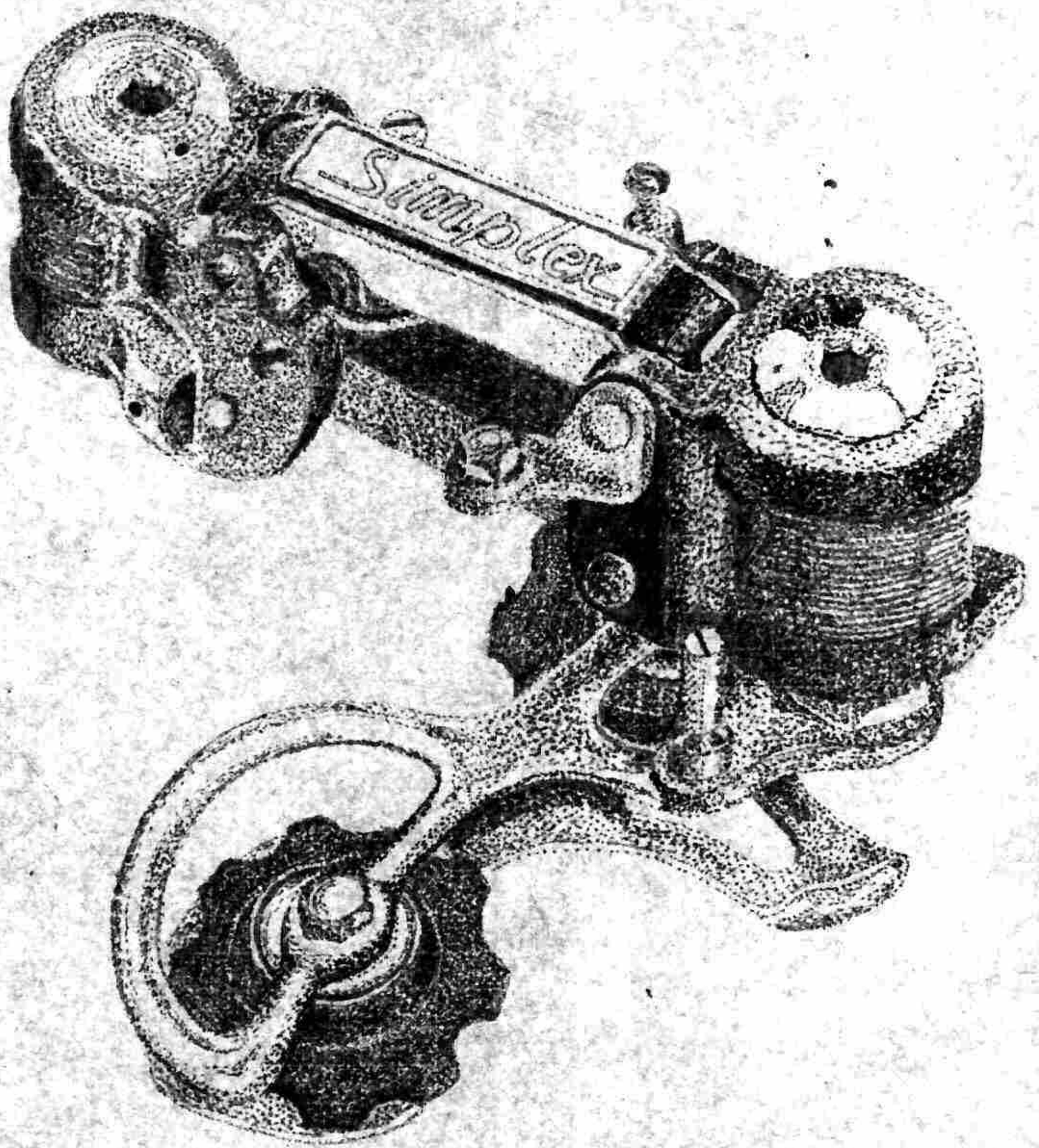
Top and Low '76



K. KURIHARA

―― 目　次 ――

		ページ
☆TITCCこの1年		1
☆はじめに（部長2年冨田）		2
I クラブ行事		
☆春合宿を通して	（2年名取）	3
☆新歓ラン実話	（1年大塚）	11
○ある日の部誌		14
☆予備合宿	（1年西尾）	15
☆予備合宿'76	（1年小島）	17
☆夏合宿	（1年三浦）	21
☆工大祭に寄す	（1年古木）	25
II フリーラン		
☆伊豆半島を走って	（2年宝谷）	29
☆サイクリングレポート	（4年岩根）	31
☆森林公園サイクリング	（1年吉田）	35
☆初めての1人旅	（1年鈴木）	37
☆伊豆フリーラン	（1年曽我部）	39
○ある日の部誌		42
☆死にそうになった秋フリーラン	（2年栗原）	43

―― 目　次 ――

ページ

☆信州東フリーラン(2年鈴木)　45

☆恐怖のナイトラン　(4年日比野)　47

Ⅲ. エッセイ

☆雑感　(1年小野)　51

☆サイクリングを始めて　(1年佐藤)　53

☆サイクリングについて　(東女1年相沢)　55

☆東京工業大学サイクリング部皆々様　57
(東女1年秋山)

☆今までをふり返って　(2年金谷)　61

☆負けてたまるか　(2年沢木)　65

☆私とTITCC　(2年冨田)　69

☆ふりーとーきんぐ　(3年野崎)　73

。ある日の部誌　78

☆8月の乾いた砂　(4年永瀬)　79

☆今は幻の女子部員として　(4年夏目)　81

☆オレとサイクリング　(4年西原)　83

☆パートタイム　(4年杉浦)　87

☆雑感　(修士1年成田)　91

☆ Cycling　(1年 蒲崎)　93

☆編集後記(書記 2年金谷)　98

TITCC　この一年間の歩み

- 1月　7日　新春麻雀大会　於 101教室
  18日　サイクルオリエンテーリング　於 八王寺界隈
- 2月　27日　追い出しコンパ
  追放された人　藤倉氏　成田氏　武石氏
- 3月　30日　春合宿〈九州〉　宮崎に集合
  A班　堀、藤原、日比野、小柳、溝口、金谷、沢木
  B班　野崎、松重、栗原、鈴木I、名取、笠谷
- 4月　新入生入部
  大坂、小野、小島、酒部、佐藤、鈴木
  曽我部、風尾、古木、三浦、吉田、渕島
- 5月　8日　新入生歓迎コンパ
  16日　新入生歓迎ラン　〈秋川渓谷〉
  フリーラン
- 6月　27日　サイクルサッカー　関東学生前期リーグ戦
- 7月　14~17日　予備合宿　〈志賀高原〉
  男女3名入部　金田、秋山、相沢
- 7月 24日 ~ 8月 12日　夏合宿　〈北海道〉　釧路にて集合
  A班　蜂田、栗原、小野、酒部、風尾
  B班　小柳　沢木　鈴木I
  C班　笠谷　名取　鈴木II、大坂　小島、曽我部
  古木　三浦
  D班　井村　野崎　溝口、吉田
- 9月　5日　サイクルサッカー　全日本選手権
- 10月　17日　富士 Hill Climb Time Trial
  〃　24日　サイクルサッカー　関東学生後期リーグ戦
  フリーラン
  30日　工大祭
- 11月　3日
  23日　月例ラン　〈三浦半島〉
- 12月　16日　忘年会　於 なかよし
  〃　サイクルサッカー　新人戦

はじめに

岡田 尚

一月七日の新春大会に始まり、十二月十五日の忘年会にて幕を閉じました。'76年、サイクリング部にとって如何なる年だったでしょうか。サイクリング部も、家族的で暖かい味のある、それでいて全部員が一丸となって活動していた昨年とは、少し様変わったものであったと思います。

先ず、部員数が新入生により大幅に増えた事、又、東京女子大へも進出し、未だ3名でありますが、支部が出来た事が挙げられます。

次に、ここのところ下火になっていた、月刊ランが強化され、特に富士十二では益々拡張した事も大きな変化と思われます。

又、異色なところでは、予備合宿において、留学生のN.S.Verma、Krishna Kumar、両氏の特別参加があり、仲々楽しいものでした。

しかし、楽しい事ばかりではありませんでした。

五月、日には、東工大から青学へ転学された望月英臣氏が、自殺これるという、全部員にとって悲しい出来事もありました。

この一年を振り返ってみて、反省すべきところが多くあることと思われます。それらの反省を土台にして、今後、より一層協力し合い、部をみんなの手で発展させて行こうではありませんか。

末筆ながら、小生が、借越作、前期企画局長、ESLとA理事、後期部長を始めさせて戴き、各方面にミャミャリ出て、部の円滑な活動に多大な支障を来たした事を、御詫び致します。

春合宿を通して

名取暢

今、地図をみながら、ここからの開聞岳はよかったなあー！などと、ひとり春合宿の思い出にふけっている。初めての合宿参加（夏合宿は足のケガのため不参加）と言う事で出発する前は、体力的不安などを感じていたのだが、いざ初めてみると、そんな事は忘れてしまいツーリングの楽しさもどかに感じた自分であった。

鹿児島―桜島―西郷隆盛。鹿児島と言うよりは"薩摩"と呼んだ方が、ピーンとくるこの厳史的雰囲気のプンプンする土地を訪れる事は非常に興味深かった。明治維新の豪傑西郷隆盛を生んだ"薩摩"。"西郷どんー"が代表するようなすばらしい薩摩気質にかすかでも触れたい気持ちで旅を続けた。しかし僕の野望はかき消されてしまうのだが、、、、。"自分たちこそ本来の日本人だ"と考えていた"薩摩男人"この精神・想像の域をこすほどついるあんどん的気質。その人の前に出ると無限に大きな厚い壁にぶつかったような威圧感とともに無限の安心感を抱くような人気質に触れたかった。僕は男の理想をそこにみている。そっゆう意味で今回の合宿の最大の目的は"男人気質にかすでも触れてきたい"という所にあったのだが、無望に下甲斐もなく目的は十分に達せられなかった。冷静に考えれば無理ない事で、高々2週間位の旅で、しかも毎日違う場所で宿泊りしているような旅ではこの目的は達せられるはずがない

のである。少なくとも合宿期間中ずっと同じ場所に寝泊りしてこの土地の人とじかに接触しない事には無理な話なのである。したがって今回の合宿は僕にとって観光旅行的雰囲気（名所も見てあるくだけの）要素を多分に含んだものになってしまった。

そもそも合宿の意義であるが、一つには普段のフリーランでは足を伸ばせられない（距離的、日数的）所に、長期のツーリング計画を立てて走ってみる。こと言う事がとげられると思う。それは良いとして、合宿の目的である。目的をなにに定めるかによって合宿の内容ががらりと変わってくると思う。

①走る事に重点をおく

②観光的要素をたぶんに多く取り入れる

①の場合は、自転車というものに十分重点をおいた物になり、全走行距離が延べ何km、峠がいくつという具合いになってしまうだろう。②の場合、自転車を手段として使う場合であり、あくまでも目的は観光旅行。この他の①と混合した形もあるだろう、どの形が良いという事は個人個人の問題で他人がとやかく言う必要はないが、今回の合宿は限りなく②形に近い物になったのは、ゆがみもない事実である。ここで考えるに②の形になった場合、しかも完全に自転車を交通手段として使う場合なんともむずかしさをあさえる事ができない。ここにはもし金があったら、自転車ではなく、バスでもタクシーでもよいのであるという考えが入ってくる。それでは自転車で旅をするという意義がなくなってしまう。しかし実際はそこの間には何かの違いがあるのである。バスで旅するのと自転車で旅

するのと。バスではいけない所へでも自転車では行けるぞ！と誰かがこうかもしれない。そうこれもあるだろう。道からそれたちょっとした所で観光地図にものっていないすばらしい所を発見するかもしれない。しかしもっともっと大きな違いがあるように思える。それはいまの土地の空気にじかに触れる、と言う事にあるのではないか。走りながら海のかおりを味わう。それはいものの臭いがプンプンするかおりかもしれない。山のかおりを味わう。これは新鮮な松のにおいかもしれない。田舎の子どもたちの遊んでいる姿そんな物の中にもその土地の雰囲気を十分にかみしめる事ができるだろう。バスに乗ってはあじわえぬ物である。それに苦労して坂道を上って目的地にたどり着く、その目的地に立って風景をながめる。その風景をながめる。それはあっと言う間にバスに乗ってきて風景をながめるのと、同じ風景をながめる事ができる二分に違った感じを持ってしまう。"苦労してここまできた甲斐があったよ！"と言う満足感はバスの運中の何十倍かに値するものだろう。この反対なにかなくしたこんな所か！足がかわいそうだよ。と思う時もあるだろうが どっちにしても バスで乗って来た運中の何十倍もの感情量を持ってそこの風景を見れることだろう。このような理由で今回の合宿は②の形に近い物になってしまったけどそれはそれで楽しい旅だったと思っている。

話は元に戻って言うまでもなく九州と言う所は新婚さんの多い所である 今合宿も新婚さ

んが月についてはなれない旅ごころだった。ここで

(校)情報 九州へ新婚旅行する新郎さんに美人な

し、ここは僕が秘かにいろんな所で取ったデ

ータであるが。特に長崎鼻へ行く新郎さんは不

作のようである。(もし長崎鼻へ新婚旅行へ行

った方もしくは、新婚旅行へいった新婚さんの

知人の方、ごめんなさい。)薩摩富士と呼ばれ

る開聞岳には どうも似合わない新郎さんが多

いみたいだ。ここでまた横道にそれるが、地方

へ行けば必ず何々富士と呼ばれる山があるけれ

どそんなに富士は美しい山なのだろうか。確か

に美しいけれど何か物足りない山である。確か

にまとまっていて、安定していて美しいけど

かえってそこが物足りないのである。もっとご

「つごつしたむが好きだ。形はかっこ悪くても

もっとかっこりした強さがほしい。自分がそう

思うのは老いせいかもしれない、年を取ってみ

れば不安定の物より安定した物を好むのかもし

れない。そんな訳で何々富士と名前がつくと少

しいやくな感じがしてならない。開聞岳も開聞

岳としてみればいい山なのだが、薩摩富士とな

るとケシ眉をくもらせない訳にはゆかない。

富士には月見草がよく似合う

開聞岳には新郎はよく似合わない

それにくべ桜島はなくともぶかっこうの山でと

ても好感を持てる(山なのに桜島とは……)

男らしくて とうとうとしていてなくともまこと

ない。まさかあの山に何々富士というような名

前をつける人はいないだろうから 安心してい

る。今回の合宿は山にはほとんど行かず 海岸

線ばかり走ったのでけし物足りない気もしたが、いつもながらの海岸線の道路のドライブ・ダウンには開口した。岬ですばらしい所を一つ紹介しておこう。都井岬はいい！前に広々とした大平洋が広がりなんとも言えない。半島から入っていくのだが、岬までいくのに少しとりがっちゃいが馬もさるもいて非常に美しい岬だ。南国の燈台の感じがでていて実に良い所だ。日南の海岸なんかよりずっといい。次に今回の合宿で一番楽しかった事。これは知る人ぞ知る光代ちゃんである。僕はあのライオン、松重さんは雄ライオン他はおがわザル。これは彼女がつけてくれたニックネームである。指宿での一夜、市内の公園にテントを張ったのだが、近くの子どもが遊びにきたのである。光代、松代、田広の三兄弟である。特に光代ちゃんは美人で当時小学校五年生。十年後が楽しみなあどけない子。その夜は九時過ぎまでハンケチ蓮ったりへ今合宿では他クギ打ち、カンケリとか子どもの遊びがはやったのだが、みんな童心に戻って。指宿の町は砂風呂、ジャングル風呂で有名な温泉町だが、先輩の話によると"砂風呂とジャングル風呂はいいよ。ことさらう事だ。"だが期待はずれ。砂風呂はゆかた姿がずけずけとも良いという事だったが相手がおばあちゃんではなあ。ジャングル風呂は混浴とこれ女性外人女ではなあ。言う話だったが、これまたおばあちゃんとへん。

もう一つ今回の合宿の特徴はお手伝いさんである。金欠病の人が一人いたため、小とんと置の

ある所には泊まらず、ひたすら学校、お寺めぐりであった。一つ感動したお寺があったから紹介しよう。鹿屋市古江の浄土真宗花岡山浄福寺である。本家と分家があり、本家の住職さんの親切さにはまいってしまう。本家は町からはずれた山のふもとにあるにもかかわらず、あまりの親切さにおどろいてしまった。現今旅人にお金を出させて宿まらせるというお寺があるそうだが、ここの住職さんの仏のあかでもせんじて飲ませたい位だ。ごはんにはミイタケごはん、晩酌には"薩摩のいも焼酎"へいさて、この焼酎にはまいったが。おやつもかかさずけんとも夢ごこちである。雨降りもあって、結局このお寺には二晩も泊めてもらったのである。住職さんは"君たちみたいな人たちを泊めるのが好きなのだよ。ことこう。ま、たく好きで行ければできない事だ。飲の心配、風呂の心配、酒の心配とみやつの心配まで。夜はおそくまで住職さんと焼酎を飲みながらいろんな事を話した。残念な事は住職さんが、この土地のはまれの人だったもっとよかったのに、大阪はまれだそうだ。それでも江戸時代における薩摩藩の真宗への圧迫の事実などを聞かしてもらって、別れを告げたのであった。ちなみに住職さんの話では、"お寺の門をくぐる時は心を空にしてくぐらねばいけない、なんの欲望も、期待もあってはいけない。"と言う事だった。それから焼酎はなまで飲むのが一番いいがそれがいやだったら、お湯で割るのが良いと言う話だった。今回の合宿はこのお寺も含めて

お寺に四泊したが、お寺は非常に親切である事がわかった。これは田舎のお寺にかぎるが。それから、合宿はやっぱりキャンプかそれとも宿泊すりが良い。宿屋はだめだ。旅のおもしろさが半減する。もっとも前に書いたのの形の合宿では、これはあてはまらないが。このような形の合宿では宿を取るために合宿中、一日位は宿屋もよかろうが、なるべくキャンプがお寺にしたい。そこの土地の人にケーでも多く接触するためにもこの方がよい。

最後に今後自分のしたいツーリングを述べて終りにしたいと思う。前にも述べたが、僕は旅の目的の一つにその土地の人たちの人から、人情に触れたいという事をいつも思っているのだが、この目的は合宿ではとってはいはたせない物だと思っているし、その事を合宿に期待するのも、まちがっていると思うのだが、今度ツーリングと言う形で、一週間位同じ地域にすっと宿泊すりし、じっくりこの地方に腰を落ち着けたいと思っている。この場合、行動範囲も、せまくなるだろう事は確かに車である。しかし、これまでになかった旅ができるのではないかと思っている。しかしこの場合、自転車で行く必要があるのだろうか？と思うのであるが、しかし自転車を持って行かないとなくとなくさみしい気持ちがするのではないかと思う。一つの場所をベースキャンプとしてそこを行動の中心として日帰りコースを組む。徒歩よりも自転車の方が明らかに行動範囲が広くいろんな所へでもいける。しかも、前にもたようにバス

MEMO メモ MEMO

のような他の乗物にない利点が自転車にはある。しかも同じ場所に宿泊するようなことで、目的は十二分といかないまでも　ある程度は達せられると思う。

おわり

今回からツーリングレポートに要求される内容がかわり、当惑したのだが結局このようにしかしてあなたの残念でからなくなってすいません。しかし一応　今回の合宿を通して自分の合宿についての考え、してみたいツーリングなどと言う事をとりとめもなく書いてみたつもりです。

新歓ラン実話

大塚隆夫

もう一回秋川渓谷へ行ってみたい――という
のが今のぼくの気持ちです。つまり、昨年したあ
あの道を、合宿やフリーラン、タイムトライアル
を経験した今、走ってみたいと思うのです。
五月三日は天気もよく、さっそくとも仲間に来
たのですが、諸先輩方はテツマンをやったらしく
く寝ていきました。何やかや言っているうちに、
そろそろ本番前に整列しました。部長の野崎さん
んとか言う人（このころはよく知らなかった）が
が乗り方をコーチしてくれました。さあ出発。
名取さんとか言う人がコースリーダーでしたが、
が、何とペースが早いのでしょう。ぼくは多摩
川サイクリングロードを必死でこいでいきました。
先輩たちが平然と走っているのが不思議でし
した。ほんとはいっしょうけんめい走っているの
のではないかと　あの時感覚を持ちましたが、
今考えてみると、そうでもなかったことがわか
ります。とにかくしっかりと　サイクリング部
の善だったのです。
途中で石川君が行方不明になって、富田さん
とか沢木さんとかいう人たちが、行ったり来た
りしていたようです。このために予定が多少狂
ったようでした。再びひさこ橋に分かれて出発
しました。そしてハモ子で昼食でした。
午後はだんだん坂も多くなって　ぼくはこ
ぎにこぎ、たまらなくなってきました。
た。前を走っていた野崎さんが「きついか？
若い風だから頑張れ」と言ってくれました。

けた時、ドッと疲れが出ました。あれでも速い風だったのでしょうか？　しかし、ギャラリーじゃなかったのもアホなことだと思っています。ちょっとした下りがありましたが、あの時には何と豪快に思えたことでしょうか。

秋川渓谷は大した所ではなかったと思います。すなわち、あのツーリングは走ることだけに命をかける諸かさんが、一年をいじめようとして計画したものではありがたという感じは今も変わりません。秋川渓谷では疲れて何とかパッとしませんでした。走ったというえ実感もなかったようです。まして金谷さんとかいう人が、ジャンプしそこねて川に落ちたりしたので、疲労度は高まる一方でした。

言い忘れましたが、約4数の人々はハエるで帰って来たのです。やはり一年をいじめるために命にた。Eから戻れたのではないかという感じが、ここで感をもたげてくるのです。

帰りは楽なEコースをたどりました。何とか行きまり感かったようです。金子一人二人と、そのまま帰宅した人もいました。雨が降り出して新しいヤッケの初着用でしました。でもあれが水を通すということはどういうことでしょうでしょうと、なってはあとの祭りです。

陸上部長福で使用に客っても雨、いっしょにいた人は、野崎さん青口さん金木君三浦君でした と思います。野崎さんが、「ラーメンを食べよう。」と提案したのですが、おごりでなかったことが悔やまれます。やがて雨もあがり、再びサイクリングロードにのりました。今度は向かい風

で何と走りづらかったことでしょうか。バーの下の方をにぎってできるだけ低れを少なくして走ったりがきのうのようにはれます。

野崎さんの提案がこことまた発揮します。

「パンを食べよう。」パンは、ありませんでした。三浦のスポークが折れたのもこのころでした。

と記録しています。

学校に着いた時は、もうクタクタで、部室にはは、先着組が寝ていました。ビールを買ってきて乾杯しました。

これほどまでにサイクリングが厳しいものと誰が予想したでありましょうか。この頃が残り、多少なりとも後々のぼくの生活に影響を及ぼしたというのは否めない事実であります。

Tokyo Institute of Technology Cycling Club

―― ある日の部誌 ――

☆4月22日(木)

*我々が部室にくると、非情にも誰もいない。ストレス解消にもめげず、相模湖・津久井湖フリーランをやってきたのだ。クソ！

実に百数十km におよぶサイクリングであった。10時、自宅を出発。途中1.5時間ほどの休憩をのぞけば、走りずめであった。帰りのサイクリングロードは向かい風と疲れで、耐えきれなかった。アーあがいたい。もうこれ以上書けない。おわり

*富田、名取　　(富田)

☆5月27日(木)

5時ともなると誰も部室にいないのであろうかと実験から帰ったら、鈴木と栗原があめ玉しゃぶりながら来ました。まあ、たまには麻雀もやりたい物。ところで1時半頃、小島さんと原さんの研究室へ行ったら合ハイの写真が貼ってあったのだ。ブス――。しかし、原さんの好みはあんなもんじゃ。(沢木)

☆5月31日(月)

きょうは昼休みに部室に来ようと思ったところ、我高校からのもう1人の現役で入った奴に会って、スロープで話していた。そいつの話によると、今年の入試最低点は、*615点で4人にいるそうだ。モシカシタラ――ウワーワタシカモシレン。

*950点満点　　(三浦)

予備合宿

西尾　毅

月四つ出たほいのようなほいのほいく、予備合宿について書くときにや思い出し出しせにやちぬ　というわけで、まずは要項から。

期日：昭和51年7月14日～17日
参加者：岩根、野崎、富田、沢本、佐藤、吉田、曽我部、西尾、ベルマ
クリッシュ（以上見学班）
コース：中軽井沢―北軽井沢㊐―嬬恋村㊐―天狗岳㊐―長野

この合宿、途中予定変更などがあって、最初の出発とは中がなかったが、彼ら一年生には予備の合宿という意味で、実に有益だった。

キャンピングはもちろん　食器のなかみ、ふりかけマーガリン、ペースト等、いちいち覚えていたが、夏合宿になって、ふりかけ何のハンガあれほど高級品にランクされようとは…

初めてのキャンピングは、口数少、バタトンの常識をうち砕いたが、もっぱらタリンゲの楽しさを教えてくれた。実に四日間充実のmと　画期的なスケジュールであった。

従来は帰宅すると　安者感ととして　金銭授行くものかという後悔の念が起ってきたものだが、今回はさほどもちろん　たっぷりとこの合宿　を輪行で、いろいろ見聞してきた。

クにとりつかれてしまった。

また、天者のため書いておこう。

○朝八分日に匹敵いらず

出発前夜、先輩が何かも詰め込むのに感動して、ついついパッキングの思と化してしまった。バック、キャリヤ、分担品等は全て輪行袋に収まったのが運のつき、翌日は死のロードそのもので、ようやく軽井沢に着き、輪行袋をあけてみると、なんと最後はキャスターは踊りまくり、フレームには傷がつくしてさんさんたった。ばか食い、ばか話めはやめたほうがよい。

○燈台もと暗し

今度は帰りの長野駅でのこと、一人早めに輪行が終ったので、涼しい顔をして時間ぎりぎりまで手伝って、急いで電車に乗ると、がーん、ないのです。そうミュラッカないのです。思いで探しに行ったが、こういう時に限って、拾ったという。事務室に届けた人がいるとのこと。うろうろしているうちに、結局一人乗り遅れて、次の列急に変らなければならなくなったのだ。すかさず一言、手荷物の多いときは、ほどほどが根性で、持って行くのがよい。さらに行方のことをきづれ付けるのが先決である。

ということで、最初と最後はたまらなかったが、何といっても最終を登った自信は大きかった。途中、予定より一日遅れたために、吉田は登らずに帰ていま、たり、実に惜しいことをした。と思う。人数が多く、ペースが乱れたり、連絡がうまくいかなかったりということがよくある。コツヘルが足りなかったりしてふたたび疑いドリーとしたが、多人数では特に、炊事係とか、ミステイクを徹底させなければならないと思った。

予備合宿。76

小島 正也

周囲の色彩が失なわれてしまった。もうどれだけ上って来たのだろう。時折り対向車が異様とも言える色彩感を残して去って行く。そして後には再び白い霧の中に無気味なぐらいの静けさがあるだけである。その中を十数人のサイクリストが上って行く。群馬県志賀草津有料道路草津区間と書かれた料金所を過ぎてからまだそう時間はたっていないはずである。ポツポツと来ていた雨足が早くなったようだ。勇大であろう風景は一面の霧で覆われて白くぼやけて溶け込んでしまっている。「ついてないな。」僕は舌打ちをして変速機(デレイラー)のレバーを引いた。カチンという快よい手応えとともに、踏み足の軽くなるのを感じながら、急になった勾配にこたえるべく、回転数をわずかに増した。予備合宿は二日目をむかえていた。

僕がサイクリングの道に首をつっ込んでから初めてのツーリングでかくようの連続勾配を走ろうとは夢にも思っていなかったから、「これが坂か。」という実感とともに、「なんでこんな所を走らなくちゃならないのか。」という疑問を抱かないではいられない。おまけにサイドキャリアまでつけたキャンピング装備でである。そんな考えが頭の中でペダルを踏む足のように、何ども クルクルと回っている。

道は終わることを知らないのか、霧の中に続いている。しだいに雨足がはやくなる代りに、視界がわずかづつ良くなってきたようである。木々の数が減って高度がだいぶ増したことがわかる。しだいにコーナーが増えてくねくねと上っていく。いつの間にか一人で走っている自分に気がつき、ふと不安感と孤独感がよぎる。雨足がさらに強くなって来た。雨の中にロッジが見える。殺生ヶ原ロッジである。先頭を走っていた僕は後からくるみんなを待ってロッジの中へ飛び込んだ。

殺生ヶ原の硫黄の臭気が鼻をつく。すでに周囲に岩肌を見せている高山のワイコアイングロードと化して、上っている。山頂方向は未だ霧へというより雲の中にかくれている。時々風が霧を運びさって、視界がひらけて、下の方が見える。その変化が大きいので思わずハッとさせられる。

「よくここまでよってきたなあ。」と感心してしまう。まだ頂上に着けないのであろうか。あとどれくらいなのだろうか。そうだきっと次のコーナーを回ると頂上だ。もうすぐだ。と自己暗示をかけてがんばる。後で考えれば実にばかばかしいことなのだが。そうすることでいく分か気が楽になる。でもうどれくらい上って来たのかなあ。

弓池ロッジはもうすぐ先だ。―その思いながらも、空腹と疲労で足がいうことを聞いてくれない。もう目の前に見えているのだが、自転車を路側に倒して草津で買ったパンにかじりつく。雨がかなり強く降って

いるが、無心にパンにかじりつく。それから弓池ロッジへ飛び込んだ。ロッジ内で濡れた衣類を乾かす。殺生ヶ原ロッジではストーブをつけてくれたがここではまるでその気はない。もう日がくれそうだ。

山田峠を下ると再び上る道を悟性もなくなった足で上っていると、ボトルを忘れて来たことに気がつくが、戻る気力はもうみじんもなかった。

法峠、標高二一七二mの文字が、感動的だった。ついにやった。長かったアタックではあったが、ついにやったのだ。日が暮れかかった峠の上で全員が雨の中、茫然としてしばしいたようだった。しかしあまりのんびりもしていられない。雨の中、暮れさってしまうと、下りがいかに恐しいかぐらい僕にだってわかるのだ。

その日の夜もれ明になると、どうやら飯の仕度も整ったようである。志賀高原は本戸池キャンプ場のバンガローの中には全員が入って炊いが、冷え込む外とは対照的に熱気がこもっている。全員の顔には疲の色が見えるが、しかし満ちたりているように見える。食事が終り、SUNTORYが御飯にとって変わるころには、会話がはずんでなごやかな雰囲気が部屋に満ちている。

思ってみれば、何ど止めようと思ったことか。しかし今、僕を満たしているこの味こい疲労は何なのだろう。この満足感はいったい何なのか。古人が「山がそこにあるから

ら登る」と言って長野市内を、ふと分かったような気がした。何故に自転車に乗るのか。それをこの気持ちが、今僕の体に満ちている。この満足感が、君えているような気がする。「もう一生、サドルを降りることは出来ないな。」ふとこんな言葉が頭に浮んだ。まだバニガローの中には会話が続いて夜のふけるのを知らない。僕は水割の入ったコップを傾けて、金色の液体を喉に流し込んだ。

――次の日は、我々の苦労に報えるかのように晴れて、良い天気となった。我々は長野まで下って無事に予備合宿を終えることが出来た。――

期日　1976年7月14日～17日
メンバー　後半組

満口　宝谷　鉄木(2)　栗原
大塚　古木　小野　三浦
鉄木(1)　小島

前半組（途中合流）
富田　西尾　宮部　佐藤

和神　堀　（長野原から合流）

written by　小島正也

夏合宿

―青年は草むらをめざす―

三浦　洋嗣

「ビューン」「ガタガタガタン」凸凹道を一台の赤い自転車がとばす。眼前に迫る右カーブ。車上の青年は何かに憑かれたように直進する。青年は車上で腰を浮かせた。そして草むらをめざした。

僕はクラブの仲間七人と北海道へ合宿に来ていた。七日前に上川を出発して八月四日、知床半島のウトロにやってきていた。

ウトロに着いて、キャンプ場にテントを張り、フロントバッグひとつで仲間たちは魔の知床五湖へ向かった。曇り空からはいまにも雨つぶが落ちてきそうだった。痛みさっていた僕はいやいやながら出かけた。

もちろん道は舗装してあるはずもなく、のぼりの道を無言でペダルを踏み続けた。足は半分死んでいた。何何　いや何十倍ぐらい疲ったろうか　道はゆるやかな下りになり、死にかけた足はしばしの休息を得ていた。そして僕は　あの恐怖の直線コースへ入っていった。かなり長い下り坂。前方には　小島、古木がいた。彼の心にはムラムラと野望がわいてきた。小島　古木たちをこの直線で抜き去ろうという野望が。

僕は完全に、競輪選手というよりも自動車レーサーになりきっていた。頭の中に瞬時にして計画ができる。――――このカタカタ道では当然前の車はブレーキをかけて下っていく。そこを

ーブレーキでギリギリまで行って直線で抜き去ってコーナーをクリアできる――！！！ 僕の目には華麗な走行ライン コーナリングの曲線が鮮明に映っていた。

「ガタガタガタガタン、ガタガタガタガタン」凸凹道を自転車はとびはねるようにスピードを増し下っていた。ハンドルを握る手に汗がにじむ。予想どおり前の車は減速している。小鳥を抜くそして古木に並び抜き去る。驚きの声 「ブレーンがぜた。」という声が耳に入る。僕の心には「ヤッタ」という叫び声があがる。

ところが、ところがである。凸凹道をとびはねて下ってきた自転車、ブレーキをかけることができない。かけようものならはじきとばされるだろう。眼前に迫る右カーブ、しかもアウト側には砂が盛ってある。そこですべって転倒するわけにはいかない。

その時、僕の脳裏を二十日ほど前の予備合宿でのことがかすめた。その時僕は予備合宿でドの右カーブを曲がりきれなかったのだ。ガードレールの間隙をぬい、道をとび出し転倒し、坂をすべり落ちていくこの自我が自転車を必死にひっぱり上げるという離れ業(?)をやっていた、そして今また！

僕はカーブに突入した。その瞬間から、僕は頭の中に描いた華麗な自転車曲線に別れを告げた。そう、自転車は直進した。わずかに減速しながら。目の前にひろがる草むら。腰を浮かせた。そして自転車もろとも突込んだ。「ザザザー」。突込み転倒すると同時に僕は自転車から降りて

いた。両手でハンドルをしっかりと握っていた。
自転車はハンドルを中心に四分の一回転して止
まった。一瞬の静寂の後、僕は立ち上がり自転
車を引っぱり上げる。けがはないようだ。どこ
もそう痛くない。「おいおい大丈夫かよ」という
うち木に「ああ平気だ」と答えて、僕はこんな
ドジを二度もやった恥しさと、テレ臭さからい
とり車を押して前へ進んだ。ハンドルはコンニ
チハとおじぎをしていたが、それを直さず、何
ともないことを装っていた。後から来た人の「
何、三角がまたやっただけ」と言う声が聞こえ
みんなが集まって現場検証を行なっていた。僕
は恥しさからコンニチハのハンドルの自転車に
またがり一人先に進んで行った。
これでこの日最大のeveントは終わりを告
げるかと思われたが、そうではなかった。

事故後の僕は慎重すぎた。何事もなくこの
知床五湖大到着。僕はさっそくハンドルをみん
なの知らないうちに直し、やれやれと光を緩め
うと思いボトルに手をかけようとしてなな
ない。ボトルが消えている。さっきの所で
取りに戻らしい。しかたなく帰りにさがそう
と思いつつ人がと知床五湖をまわった。ところ
がそれがまったくの誤算だった。知床五湖とは
ぶにふさわしい。早々にしてあげてきた。そし
て帰り道、ボトルの捜索をした。捜索は難航し
たが、結局ささやかれていたのだった。
これで魔の知床五湖の話は終わる。実にひど
いところ。これから人のすく自転車にせいとも

抵さんして行かせなければ。

最後に、初めての夏合宿の全体的な感想を述べようと思う。

後は昨年からもし大学に入れたら一年の夏休みには北海道へ行きたいと思っていた。その希望を実現することができてとてもうれしい。北海道はやはり北海道だった。よかった。中でも一番印象に残っているのは、サロマ湖で見た星空だ。星が降ってきたという表現を初めて実感として理解できた。天の川がはっきり見え、東京では、どこに星座があるのかと必死にさがさねばならないのに、そこでは「あれ、あれが北斗七星、あれがW座」とすぐわかる。よごれた空を見て「星座を考えた昔の人は何と想像力が豊かなんだ」と思うのがまちがいであることをあの星空は教えてくれた。

場所や景色だけではない。合宿の生活の中でもいろいろなことを知り、考えた。毎日の食事で生存競争の厳しさを。狭いテントにぎっしりあたった夜の寝袋の中で人生の厳しさを。そしていちばん大きなものは、先輩たち また同じ一年生たちの暖かい心に触れることができたことだ。サイクリング部に入ってほんとうによかったと思った。

また来年の合宿も、先輩たち そして同輩後輩たちと楽しい合宿をしたいと思う。事故のないように。

FIN

工大祭に寄す

6631 古木 のぼる

A「大学祭っていうのは、やっぱり派手にやらないと意味がないだろう。そういう意味では、工大祭は、例年、つまらないものになっている。」

B「たしかにそうだ。しかし、派手なばかりが能じゃない。三田や駒場をみても、やたらとワヤワヤテル凸という感じで、疲れる。」

A「お前、駒馬祭行ったのか。」

B「いや」

A「あほ、見ないでゆーな、ちゅのに。」

B「たとえばの話として言ったんだ。」

A「理由になってない。」

B「それはそうと、大学祭にも、いろんな行き方があっていいと思う。」→

A「しかし、だからといって、工大祭のようにショボクレたのが、大学祭と言えるかどうか…」

B「工大祭のどこがショボいんだ。サークル数や学生数を考えれば仕方なかろう。」

A「でも 模擬店の数だって、展示、講演の数だって、ショボいやんけ。」

B「あれは あれでいいんじゃ」

A「ところで サイクリング部は何をしたの。」

B「知らん」

A「お前 責任者だろ」

B「何でも、聞くところによると、講堂のわきでだんごか何か売ってたらしいぜ」

A「よくやるよ。それで、もうかったのか。」

B「10人で4日間働いて、二万チョボ位は、もうかったらしい」

A「ご苦労さま」
B「まったく」
A「それで、何かいい事あったのか」
B「全然。昔の彼女も来なかったしな。」
A「ザマミロ」
B「何を言うか。女も居らんで」
A「うるせえ、人の事言えるか。大体な、工大に入ったからには、工大の星となるまで、女なんかには目もくれんのじゃ」
B「ウメボシみたいな顔して」
A「顔のことは言うな、ちゅのに。……えー
と、何について話してたんだっけ」
B「アホじゃのう、お前は。工大祭だ工大祭。」
A「そうそう、だから結局、あれでいいのだ。」
B「バーカ、さっきと違じゃねえか。」

A「そうか。問題はだな、その……何だ……。」
B「何が言ーたい」
A「結局、学生の意識が薄いということだ。」
B「それは言える」
A「要するに、気合が足りんのだ。」
B「言える」
A「その上、工大祭が、当局と学友会の政争の具になっていること。」
B「その通り」
A「プラス、工大祭自体の知名度不足」
B「同感」
A「それらの条件が重なって生ずる悪循環」
B「そう、そう」
A「この現実を前に、我々は、当局から団結として要求を克ちとる斗いを行なおうと思います。」

B「まったく、おめえと話をしてると疲れるぜ。」

A「へへー」

B「ところで、お前は何部だ」

A「サイクリング部」

B「何で、おまえもサイクリング部だったのか」

A「そうさ。ちゃんとロッカーもあるぜ」

B「それにしては部室で会わねえな」

A「だって学校行ってないモン」

B「あ〜あ」

A「けどさ、クラブの行事には参加してるよ」

B「うむ」

A「オー、楽しいしな。」

B「おう」

A「先輩も、おもしろいのがいっぱいいるし」

B「お前、そんなこと言うと、この原稿がボツになるぞ」

A「かまわん、かまわん。……それに、部長のTという人は……」

B「えーと、とにかく今年の工大祭は、」

A「一年生だけで」

B「がんばったのであります」

二回生（特別出演）「オレたちも手伝ったぞ〜」

四回生のHさん「ちゃんわちょんわ」

A「みんなで何かやるということは、」

B「めんどくさくて、かったるいけれど」

A「おもしろくて、ためになるのです」

B「それではみなさん」

A「♫♪ゴーキーゲーンーヨー——〜〜」

㊟登場人物はすべて仮名です。悪しからず。

会話もすべてフィクションです。

特別㊙付録

サイクリング部の工大祭 モギ店のすべて

ダンゴ部　売上 約1000 本，1本50円 仕入れ35円

コーヒー部
甘酒部　} 70円　売上 約500カップ

レンタサイクル部　30分 50円

受験生相談部　申し込み殺到するも、結局ひとり。
←ウソ。

その他：ポップコーン部　1コ 70円→50円 売上不明
あまり売れなかった。

やはり、日曜日に純益1万ぐらいあった。

全純益 2万34円位
動いたお金 8万円位

Staff:

委員長 兼 会計ちゃん　大塚氏

ダンゴ部　佐藤氏　曽我部氏

コーヒー
甘酒部　三浦氏　小野氏　小島氏
小島氏は
電気関係も兼任

レンタサイクル部　吉田氏、浦島氏

受験生相談部　鈴木氏　古木

アドバイス　二年生諸兄、および四年生の日比野氏

来年の1年生諸君、がんばってね〜〜〜

「伊豆半島を走って」

2年　室谷一夫

二学期のテストも終り暇になったので、関東在住の仲間、例によって鈴木・栗原・僕（残念ながら金谷は来れなかった。）の3人と岩根氏とで伊豆へ行った。コースの概要は一日目に沼津から西海岸沿いに松崎まで、二日目に松崎から石廊崎、下田を至て河津まで、三日目は河津から修善寺まで、四日目はサイクルスポーツセンターで遊んで宇佐美（東海岸）まで　である。

一日目は天候に恵まれず　午後は小雨が降り、計画の無理もあって　暗くなったため　YH「あざして走ることになってしまった。しかし、「西海岸はまだ観光地化されていなくて真もの部未舗装であったりして　伊豆の農村の粗ぼくさを味わえる　良いコースであったと見られる。伊豆半島を周るなら必ず西海岸も走ってほしい。

二日目は　天気も晴れて　サイクリングには絶好の日となった。マーガレットラインは高線を完全に無視して作ったような所があり　海岸線を走る所はほとんどない。峠で立ち止まると海の向こうに富士山が見えて景色の良い所もあるが　走るのに精一杯で景色どころではないといった感じだ。石廊崎は多少俗っぽいが奥石廊崎は実にいい所だ。濃青色の海水に奇怪な形の岩や小島が浮かんでいる。午後は

「石廊崎から下田へ海岸線沿いに走ったが ここ
で世にも恐ろしい事態がおこる。なんと走行中
に犬が飛びだし 先頭の栗原にかみついたのだ。
幸い傷は大したことなかったが、それ以来犬恐
怖症になり 春合宿でも犬に追いかけられ困も
苦しした。ここで犬の追払い方を言うと 足でも
ってけろうなどとせず近づいてきたら大声でど
なっておどかしてやるに限る。犬も要外 憶病
だから驚いて逃げていくことと間違いなしだ。二
日目は予定通り河津から少し山奥に入ったイH
に泊った。

三日目は天城峠を旧道を使って挑戦した。鈴
木は急なジャリ道をイニナー使わずに登ったの
だからすごいもんだ。旧道はハイキングコース
になっていて走りにくいが 山道の雰囲気が味わ
えて満足いくコースだ。ここで若根氏と合流し
天城トンネルを至て傷まずまで爽快な下り
のみ。修善寺のYHの食事はバツグンだ。ただ
丘の頂上にあるのが たまに傷って所である。

四日目は直ち該まることと2回、やっとの事で
サイクルスポーツセンターに到着した。設備が
よく一度は行くべき所だと思う。あの400mビス
トの30度バンクは恐かったナ。時間と金がな
かったので全部のコースを乗り回せなかったが
67kmコースを走れば十分満足するだろう。疲れ
なくて帰路に向った後等は 宇佐美に行く金市
で若根氏のドジな事故を見た。若根氏曰く。「俺
は必ず一回のツーリングで一回は転倒するのだ。」
伊豆を走り終えて一番感じたことは一言で言う
と「半島は山であると思うべし 以上」

サイクリングレポート

岩根 泰彦

書き出しはどんな言葉にしようか。などと内容が頭に無いのに考えていると、やたらと時間が経ってしまう。書き始めてしまえば、どうにでもなることはわかっているのに、こんな事に頭を悩ますのは実にバカバカしい。そこで、小椋佳のカセットを見て、「春の雨はやさしいはずなのに、西の空だけがシクラメンのかほり」にしようなと思ってみて、再び時間を費やす。だいたい、こんなアホなことに紙面を使う余裕があるのか、さっぱりわからない。宝谷の「岩根さ～ん、ちゃんと書いてよー！」と、金谷の「あのー、早く書いて下さい。」が耳から離れず、十六日の十一時、かじかむ手を温めながら、ぶっつけ本番で書き始めたわけだ。従って、紙面の関係、眠けの関係で、いつ果てるとも知れない、危険と冒険と男のロマンと、そして誤字・脱字に満ちたレポートが完成するはずだ。

サイクリングの事を書こう。とにかく昨年は金が無かった。どういう関係かと問われるかも知れないが、部室の前に置き去りにされた私の自転車を見ればわかる。十月か十一月、暗い夜道を家に向けて走っているとき、昨日までは無かった工事による直角の段差があって、そこにタイヤをすって転倒したのである。私はハンドルを飛び越えて、歌舞伎俳優を思いながら三三歩前へ歩いて済んだが、自転車はリムがふにゃふにゃになって、それ以来、部室の前に足蹴

している。

曲がりなりにも、四年ともなると暇がない。自転車が健在でも、特に結晶なんぞを作っていると、そう長く東京を離れるわけにもいかないし、他に何かと卒業を控えての用事があったりする。そこで あまり出掛けない。自転車が盗まれた、などという決定的な事があった一昨年は別格として、昨年は全く貧困な年であったと思う。金なし、暇なし、ついでに器量なし、三拍子揃って無い。こういう男も珍らしい。……こいはサイクリングレポートです。……と言うわけで、少し走った事を書く。

まず昨年の走り初めは、春休み、宝谷・鈴木・栗原の三人に居候したランだ。まだこの三人が「三メメトリオ」とか、「スズクリホウレ

DOJIITA

などと、けったいな名前で呼ばれていた時代の話である。私は都合で三氏に屋山で出発し、一人黙々と、峠を目指して走った。きのうまで彼らが宿泊していたはずのユースを横目で見、高校卒業の時に来た、懐しの七滝への道を眺めながら走った。そして、ジャリ道に入って、力尽きた。三十分の睡眠時間と、永いブランクがひびいたか？ ここで言っておくけれど、器量というのは顔の事では決してない。それを行うことができる器かということ、それだけの力量があるかということだ。決して顔の事ではない。というわけで、休んでいると、誰か後から走ってくる。案の定、彼らが俺を見物している間に、先になってしまったのだ。鈴木のこぼれるような笑顔が近づいて去る。やがて宝谷に抜かれ

、栗原が背後に迫った頃、天城峠に着いた。書き忘れたが、ここは伊豆半島である。この後、緒を見、ユースに泊って、翌日、サイクルスポーツセンターで遊ぶ。この間の事情は、誰れかが書くだろう。そこで、私にとっても、たいへん興味い体験について述べる。転倒の話しだ。こう書くと、こいつは年がら年じゅう転んでいるのではないか、と思う人がいるかも知れない。当たらずとも遠からずだ。その私にとってもこれは不思議な事件なのである。軽快な下り坂を、かなりのスピードで走っていると思ってもらいたい。要するに、脇へ寄り過ぎて転ぶのだが、危いと思った次の瞬間の記憶は、全く、皆無である。気付いて見ると、坂の下の方を頭に、「あお向けに寝ていた。そして、なぜか私の体の上に、自転車が見事に乗っかっている。それだけならいい。実に、その姿勢で路面を走っているのだ。思わず笑ってしまったが、「いつになったら止まるだろう。」とか「人が見てたら、なんと思うだろうか。」などという考えが頭をかけ巡っているうちに止まった。スピードが最後に来て急速に収束するのを、体で感じて、「うむ、こうなるのか。」と、どうでもいいことに感心しながら立つ。幸い怪我は、若干のすり傷だけ。自転車は、私を犠牲にしただけあって、当然無事。なぜそういう状態になったかは、想像することはできるが、実感を伴えないでいる。

次に走ったのは、七月の予備合宿である。このランについて書くのは、あまり気が進まない。書くことがあまり無い、と言えば、確かにそ

「うでもある。いくらでも有るじゃないか」と言われても、無言の肯定を与えられる。しかし、書けることを書くと、要するに、人格を疑われてしまう可能性があるのだ。このランで非常に特徴的なのは、景色もいいし、多くの人間が参加しているのに、ほとんどの思い出の中に、沢木がひょっこりと顔を出して、「カワバキ DOJILTA プネ」と、わけのわからないことを私に話しかけているということだ。

最後は、やはり七月、中央線の小諸に近い駅から、地蔵峠に登り、鹿沢の宿に泊まり、車坂峠を下って小諸に帰ったランだ。もっとも、それは結果で、しかも完全ではない。

峠に登るのを、断念したのは、これが初めてである。別に不満した話ではなく、二度チャレンジしたということだ。一度目は、食事をしなかったためか、電車に酔ってしまい、降りてからも牛乳一本、パン一個が食べられない状態。否、むしろ強烈だったのは、カンカンと照る太陽と、私を包んで、それ自体が熱を発しているような、雲一つないまっ青な空だ。私は、ヨレヨレ、カサカサ(不脱水して)になりながら、三分の一程登って、小諸まで逃げ返った。決心を先送りにするために、民宿に泊まる。翌日、心が決まらないうちに出発。しかし、足は峠に向かっている。体調も昨日よりはいい。天も味方してか、峠の上の方では小雨すら降ってきた。あとは、最初に述べた通りだ。紙面が無いのが残念だが、地蔵峠と車坂峠の間の林道は良かった。

オワリ

一枚

森林公園サイクリング

吉田多行

夏合宿から帰ってきてから数日後、運動不足のため自分用自転車に乗ってあちこちを走ってみた。合宿中は走れど走れど自転車は一向に前に進まず、という感じがしたが、疲れもとれたせいであろうか、走れど走れど自転車は前に進みすぎる。つまり、合宿後、私の自転車に乗ってみると、自分のからだと自転車とが同一の存在と考えられ、足がペダルに密着したようであった。その原因は、疲れがとれたのが最大の要因であるが、合宿によって得た技術も含まれると思う。平常合宿の時は、登りの坂道は、少し走って、少し休む。少し走って多く休む。そのように、一気に坂道を登れなかった。しかし、合宿では、遅いけれど、休まないで登れるようになった。しかし合宿は苦しかった。

さて、夏休みは、いろいろな所を走ってみた。とはいえ、全く銭のかからぬサイクリングであった。堀尾・長瀬・小川、みな我が家からの和以内の近いところである。その中で、一番おもしろかった森林公園内のサイクリングについて話してみたい。

時は8月9日、昼一時に出発、森林公園南口までは15㎞くらいだが、そこへ到着したのが二時くらいだった。どうして、そんなに時間がかかったのだろうか。故障・パンク・休憩……であろうか。いやちがう。その原因は何だろう。

実は、急に腹部に緊急事態がはし、目的地八向う途中、進行方向を逆にして、一目散に我が家の便所に引き返す。といったわけで、二時頃に森林公園南口に到着。そして150円支払い公園内に入る。すると何と！かもしかのような、大根のような足をした、むちむちした女がいっぱいいるではないか。一瞬、そこに立ちすくみ、ミニスカート・ホットパンツから出た足を鑑賞しようと思ったが、男というものは、そんなものに目を向けてはならないと思い、サイクリングコース一周を始めた。とはいうものの、若いティーニエイジャーならよいけれど、ちょっと6才くらいの幼稚園のおさまたちとありました。サイクリングコースは一周13.8kmで、30分くらで、回れると思ったが、一向するのに倍の一時間もかかってしまった。再び、その原因を究明してみようではないか。一生懸命考えた結果、結論として、混んでいた、ことが言える。さて、その走行中、思わぬハプニングが起きた。道路に蛇の行列がおこったのだ。2ひきの蛇がニョロリニョロリと道路を横断していた。するとそれを見てしまった若い女性が突然、自転車を降り、一緒に走っていた若い男性に飛びついていた。後ろを走っていた僕としては、非常に不愉快であった。蛇は嫌いなので、2匹に不愉快であり、もし2ひきの蛇が、これもまたデート中であったらう他の不愉快である。非常にうらやましいサイクリングであった。

初めての一人旅

鈴木道夫

初めての一人旅は、用に初より、くもりに終わった。雨を見ながら今市駅で、一人寂しくベンチに腰かけていると、つい今年の夏、北海道の豊富駅でこれまた同じようなことをしていた時のことが思い出されてくる。旅には雨はつきものだ。ぼくは自転車を駅に置いて、杉並木を日光ユースへと歩いていった。靴にビニール袋をかぶせ、傘をさしていった。両側にそびえ立つ杉の木にはもう若々しさは無い。傘を横にそらし上を見ると、空を隠したその杉の木々の枝から水が落ちてきた。昔の人はこの杉並木の下をどういう気持ちで歩いただろうか。いずれにせよ、今はもう天然記念物である杉並木、いつか死んでゆくだろう。

一人旅のいいところは、このように気ままにきけることだ。特に、サイクリングの場合これがよくあてはまる。二日目と三日目は運よく雨が上がり、自転車に乗れた。ゆっくり走ろうと思えばゆっくり走れるし、速くもりたくなれば速く走れる。大勢で合宿などに行ったときには、走る楽しみの他に、みんなで食事をしたり、語り合ったりする楽しみがあっていいものだ。しかし走る楽しみを本当にかなえてくれるのは、やはり一人で走ったときだ。鬼怒川を谷間に見おろしながら上っていった三日目。五十里湖から川俣湖に向かうにつれて、しだいに谷は狭く、紅葉は美しくなっていくように感じられた。そのMax.が川俣湖のすぐ手前の湖戸合峡

というところだ。谷は深く、山がそびえ立つ。昔の人の書いた絵に山水図というのがあったが、それをふと思い出した。ここで一人で走る楽しみを書くつもり出ったが、実は、この景色を見ていると、この美しさを互いに分かち合うために今ここにいたらなあと思ってしまった。カメラを持っていかなかったのが残念で仕方がない。実は持っていくカメラもないし。

川俣湖から、川俣林道、山王林道を通って中禅寺湖方面へいくコース、このコースは今回のサイクリングで最高の難関でもあるし、また一番心に残った。川俣湖と俣に川俣林道へと行。たのは、もう二時半頃だったし、少し疲れもたまってきた頃だった。いきなりくねくねと曲がった上り坂、それもずっとジャリ道、あっという間に三時になったが、まだ川俣湖が見えるのではないか。ぼくは少し焦った。道路には保護設備がなく『路肩注意』とか『転倒要心』とか書いた立て札が立っている。だんだん霧が多くなり、陽も沉んできた。道行く車の数も急に少なくなってきた。ふと向こうに見えるのは、くねくねと曲がったものすごい急坂、あの上が山王峠なのだろうか。ぼくはその急坂の途中で何度か自転車から降り、自分の今上って来た道をながめ、自分自身を励ました。今思うといい思い出だが、あのときは心細かった。

「伊豆フリーラン」

曽我部成一

・期間　十月五日～七日

・コース

東工大―茅ヶ崎―小田原―伊東（宿泊）―伊豆高原―天城―下田―入間（宿泊）―松崎―土肥―船原峠―修善寺―三島

・全走行距離　約三百五十Km

中は秋晴れになるという。カツカレーを食べ再び睡眠をとる。八時頃ようやく雨が上がった。八時半出発。予定より二時間以上遅れた。丸子橋を渡ったあたりで早くも道に迷い、後出発の警察に道を尋ねた。十二時頃茅ヶ崎を通り抜け、平塚で昼食。この頃には天気予報の通り素晴らしい秋晴れとなった。十二時半出発。酒匂川手前でサイクリストに会う。（彼はこのフリーラン中に出会った唯一のサイクリストだった）二時頃小田原市内に入る。小田原城跡にて休憩。箱根に行く予定だったのが、箱根早雲山YHに宿泊を断わられてしまった。急きょ変更し、伊東YHに宿泊予約をする。真鶴有料道路（二十円）を通り、引き続き熱海ビーチラインを通ったら自転車通行禁止。エンヤラオンヤラ坂を登り、熱海のてっぺんの松に

◎十月五日

五時起床。どこからか雨の落ちる音がするのでもしやと思ったが、やはり雨が降っていた。天気予報によると雨は一～二時間で止み、日

で休憩。ここは、何度かきたことがある懐かしい場所だ。かの有名なホテル「サンハトセ」を通り、伊東の市内を抜けホ望山ふもとのYHに着いたのは五時半。あたりはもう暗かった。

十月六日

六時五十分起床、八時出発。一度伊東まで下る。修善寺に出る道を聞いたが、相当キツイらしい。ルを引き持って登り始める。たが実際は尾すばみの登りであった。一気に修善寺に下る。温泉街を抜け修善寺駅で休憩。おさい銭を投げ、家内安全。交通安全等をお願いする。ロープウェイで天城へ。途中浄蓮の滝を見学。石段を降りて行くと二十メートル程の滝があり、又虹鱒を釣っている人も沢山居た。出発は十二時二十分。イノシシ園を横目にらみ、ひたすら登る。ゆるやかな坂がたらたらと続く。トンネル手前で休憩をとる。中が暗いので事故が起きたかと心配した。トンネルを抜けた所で休憩。伊豆の踊り子の事を考えつつにこにこかしる。天城を後にし七滝にはなはだしく惜しまれず河津に着いたのが二時。ここで昼食。下田に着いたのは三時。ここで松崎町三食若丸に宿泊する。時間の関係上石廊崎は素通り。いたるところいたが、結局松崎行は断念。入間の民宿に泊まる。風呂後夕食。さすがに海の幸が豊富で、サザエ、ワカメ、エボダイ、刺し身等が並んでいた。夜食にはナシとコーヒーを出してくれた。民宿ならではのもてなしかなかなかとてもよき過ごした。

◎十月七日

六時起床。蚊に悩まされ寝不足気味である。七時半出発。民宿のおじさんが停留所まで自動車にのせていってくれた。マーガレットライン

この景色はちかちか良い。セミが鳴いている

のにも驚いた。九時半松崎着。三食おにぎりにキャンセル料を払った後、磯遊びをする。潮たまりたね、ハゼ・エビ・ヤドカリ等がいた。けん命に追い回す。「頭を雲の上に出しレと

歌われている通りの富士山も見え、素晴らしい気分を味わった。海岸沿いの起伏の激しい道を進み、土肥に着いたのは十一時五十分。

ドライブインで昼食。十二時半に出発し、いよいよ最後の難関修善寺峠。道が狭いので車に注意しながら走る。峠着は二時。喫茶休憩に

乾いたのち牛乳を二本飲む。相模の運転し石は見事にとる。修善寺でつあみやげを買う。狩野川沿いに三島へと向かう。狩野川は釣りの人で一杯であった。新田の分岐点で休憩。さすがに疲れた。四時十分三島駅着。すぐ弁当にとりかかる。帰りの車中、佐藤と二人でささやかな打ち上げをした。今思えば、此より、又海岸の起伏の多い道ありというコースを一日百キロメートル以上走ったのはいささか強行軍であったが、それだけに心に残るものも多いようである。

――ある日の部誌――

＊7月16日(金)

P.m. 5:28　予備合宿前半組帰京

帰って来たぞー。帰りの電車の中から外をみると、雨がパラついてきた。きっとあの冨田+3名+後半組は、雨の中をまだ走ってることだろう。ギョギョッ、ギョギョッ。　(沢木)

P.m. 5:35　書き始めます

今回の予備合宿の宿泊地は、湖か池のそば。しかし蚊はいなかった。私の最後の合宿生活かと思うと、思わず笑涙がでる。

(岩根)

＊8月5日(木)

昨日、第1回東工大古河三高会(会員6名)があり、久しぶりに上京(?)してきました。

今ごろみんな、どのへん走っているのでしょうか。特に沢木たちの班が気になります。毎朝5時起床、1日90km、9時就寝という、あのスケジュールははたして守られているのであろうか……。今日あたり網走だったらすごいな。　(金谷)

＊8月23日(月)

現在MyCycleはOH(オバーホール)中で、ディレーラー前後とチェーンとブレーキ、ディレーラーワイヤーが付いていません。昨日はペダルのグリスアップを行ないました。今日あたり前ブレーキの調整でもすっかな。ムッフッフッフッ、小野君のフレーム見ましたぞ、すさまじいですな。そうそうバッグ類も修理せねば。後半はOHでつぶしそうですな。　(小島)

「死にそうになった秋フリーラン」

栗原和明

これは二年生「黄金の七人」マイナス（鈴木プラス富田）による秋フリーラン初日の栗原についての記録である。

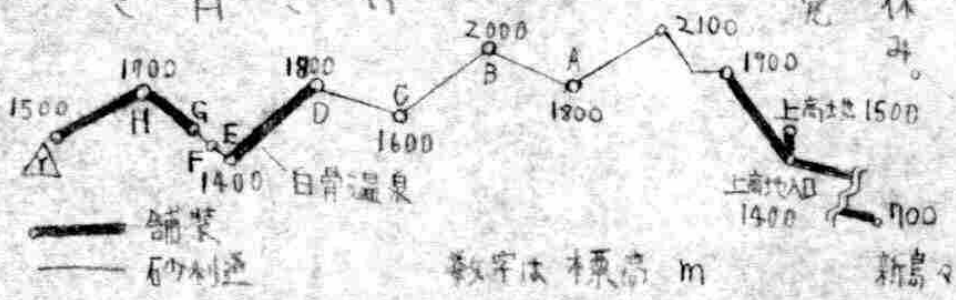
十一月二日、我々は夜行「アルプス八号」に乗りこんだ。みんなでトランプをやっていたが宝谷と名取が「これをしらないと一年にバカにされるぞ。」といって、チョンチョンをやり始めた。私と宝谷と沢木はひっしになって、そのタネをあかそうとがんばった。（私は今までにそのタネがわかったなりミ。）みんなでワイワイさわいでいると、私のとなりにすわっていた大登山者らしき人に「しずかにせい！」としかられ、全員シュボミ。そして、この登山者らしき人は私に「松本の手前でおこしてくれ。」といって、満足そうに目を閉じた。しかし私もフロントバッグを枕に寝てしまい、松本の手前で反対側、沢木におこされたのだ。ハッと思い、となりの人をおこそうとふり向くと、その人はもうおきていた。夜行で寝たのは私だけだった。そんなのになぜあのような事が。

松本で乗りかえ新宿々に到着、自転車を組みたて、朝食をとろうと駅の食堂にかってに入りこみ、かってにお茶を飲んでいると、店のおじさんがまだ準備できてないので、立喰いそばにしてくれと言われ、しかたなく天ぷらそば一パイで朝食をすませた。これが私をあのような恐しい事態におちいらせた第一歩であった。

昼食は上高地の食堂で親子どんぶりを食べた。のだ。観光地の食堂ではどこでもそうであるがここでも、その量は、なんとも少ないのだ。ふだんの私は、きわめて少食（一日平均一・七食）なので、昼食はこれですました。ほかの連中は、これだけでは足りずにパンを買い食べていた。ここで私は大きなあやまちを犯してしまった。それはサイクリングというものは、非常に体力を消耗するということ。これから先は、ハードであること。大変のなり辺びなハードな場所に行くときは、必ず非常食をもつ。これらのことを忘れていたのである。

午後は、下図のような狂意的なハードコース。AB間からはげしい空腹におそわれ、CD間では体全体に力がはいらずハンドルすら満足にもてない状態で、アクビが多発するようになり、EF間では、十米歩くごとに一休み。F点でついにダウン。路上で下覚にも寝てしまった。約一時間後目がさめ、再び空腹をかかえ自転車をひきずっていると G点になんと温泉旅館があったのです。助かったと思い、そこでせんべいを買い、空っぽの胃の内に投げこんだのです。その後はひたすら H点にむかって薄闇の中ペダルをこいだのです。

ユースでヘルパーにつもう一か月も時期がおそかったら、路上で寝たりすると寒さで本当に死ぬところだったL、と、言われた。



信州東ウリートラン

二年　金木俊明

今年の秋は一人で信州へ行った。出発は10月4日未明、まだ暗く誰もいない駅前で輪行開始。出発時というのはすべて準備を終えた状態が理想的なのに、これから輪行しなければと思うと、何となく落ちつかない。めんどうな作業だ。

十時頃、上信電鉄下仁田駅（群馬）から内山峠に向って走り出す。が、全くの向い風、その上、膝も痛み出す。何だかいやな予感がしてきた。すると、前方に「内山峠通行止」の標識が見えるではないか。しかたなく、和美峠へ軽井沢ルートに変更。全くの期待外れだった。本当なら内山峠から秋の信州を見晴らし、神津牧場でのんびり昼寝でもするはずだったのだが。

何しろ和美峠を苦労して上ぼっても、峠の先は真平らで軽井沢の町が拡がっているだけ。全く峠という雰囲気でない。その元のれ俗は、ひどい向い風のだらだらな上り下りで、重は思いっきり飛ばしてゆく。とにかく明日あさってに期待をかけていやいやペダルをこいだ。

次の日はがらっと変わって印象のよい一日だった。秋体サロンパスのおかげで膝の痛みもまあまあだし、空も快晴に近い。東餅峠を上ぼりきると、期待通りの見晴らしで千曲川沿に畑や田が苔のように続いているのが遥か下に見える。冷たい風で汗もすっかり乾き、久しぶりの爽快感を味わった。ここから湯の丸林道に入いり、地蔵峠へ向う。しばらくは標高二千メートル風たりを上下する独車が続く。下方の町々をながめ

めたり、林道から外れた山へといっても林道か
ら見れば丘のような感じに登ったりしてのん
びりと走った。そのせいか、地蔵峠に着いたの
は5時頃になってしまい、峠の下りは日陰にな
っていて寒かった。しかし今一日で、前日のつ
いていなかった分は報われたという感じだった。
三日目は美ケ原へ上った。三日目ともなる
と夏合宿のペースを完全に取り戻し順調に上り
った。この日も天気が良かったので、昼食後原
っぱで寝ころびのんびりした。そう言えば、去
年の秋のツーリングでは最終日霧ケ峰の東山に
登り、美ケ原を眺めながら行ってもよかった
なあ等と話したのを思い出した。そんな事を考
えながら霧ケ峰方面を見渡すと、何となくその
時の風景に似ているような気もした。

昨日今日といい気分で走り気が緩んだせいか、
下りで華々しく転倒してしまった。カーブで突
然前方からバスが現われたため、転倒してしま
ったが、信州も初といい所だという印象を受けた
道を走っていても所々に南日そうな雰囲気の入
口を通りかかったりする。そんな所を今度は走
ってみようなどと考えながら(日々日家へ向っ
た。

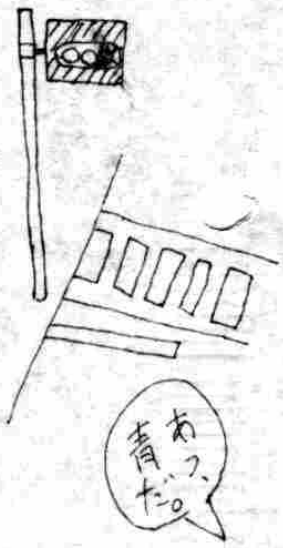
《コース》

10/4 下仁田—(和美峠)—軽井沢—大屋

10/5 大屋—小諸—車坂峠—(浅の見林道)—
地蔵峠—大屋

10/6 大屋—霧ケ峰—美ケ原—山本小屋—大屋

恐怖のナイトラン



大岡山↔江ノ島

日比野 千俊

第一章 出発(たびだち)

ぼくは、二度と思い出したくないと思って、あのことは、頭のいちばんすみっこに記憶させておいたのだが、ついに書かねばならない日が来てしまったようだ。

だれか無責任なやつが(更はぼくだが)部会で、「今年は全員に原稿を書かせる。」と言ったのが悪いのだ。あえて自己弁護をするならば、ぼくが全員と言ったのは、一〜三年のつもりであって、四年のぼくたちを含めたつもりは全くなかったのだ。しかし、あれ以来金谷が、

「日比のさん、早く原稿書いて下さいよ。」

としつこく、せまって来るのだ。ここで居直る。オレが悪いんだよ。あんなこと言い出したオレが。書けばいいんだろ、書けば。あのことを。

あれは学園祭三日目の昼ごろであった。二年生の下宿生四人組(冨田、金谷、名取、沢木)が、何やら、よからぬ相談をしているではないか。聞くともなしに聞いていると、なな、なな、なんと、ナイトランをしようという話ではないか。ナイトランなら、ぼくは大好きである。まず普通のフリーランと異って、早起きをしなくてもすむのだ。朝よりも夜のほうが、ぼくは好きなのである。

「よし、ぼくも行こう。」てなことで、話がとんとんとまとまり、深夜十二時に、江の島の日の出を目差して、集ったのは結局ぼくと、下宿四人組、そして一年の小島の六人であった。

第二章　小島の家

フロントバックを、平均三百円分のパンでいっぱいにして、ぼくたちは、夜の中原街道を快調に飛ばした。まず目差すは小島の家。小島が、手ぶくろとカメラを、とりに行きたいと言うので、みんなで押しかけて、お茶でも飲ませてもらおう、ということになってしまったのだ。

中原から第二京浜へ行き、小島が曲れと言った交差点を曲ると、ガビーン!! 小島家の前に立ちはだかるは、壁のような坂。フロントとリアをめいっぱい落として、やっとのことで、小島の家の前へたどり着き、お茶をもらい、がケんとんとんとまとまり、ブレーキゴムをりムにさびりのような坂を下り、つかせ第二京浜へ戻った時の小島の第一声は、

「あ！　カメラを忘れた。」

あとの五人は口をそろえて、

「一回生、カメラを取ってこい。」

かわいそうに、小島君は、またもその急坂を往復したのでした。

小島の家を出て、横浜をすぎて、道路標識の

というのを見ながら走っていたら急に、交通量が多くなった。

通行止め）という、標識がなかったはずなのに、「横浜新道」に入ってしまったのだ。あわてて わき道へそれ、道にさんさん迷ったあげく、やっとのことで旧道に出ることができた。

第三章　貸切道路（すいているみち）

横浜新道とちがって旧道のほうはまったく車が通らないといってよいくらいであった。だいたい五分に一台くらいしか出会わなかった。

この道が恐怖であったのだ。このナイトランが選ばれた者の走りであることを忘れていたのだ。一番前を走っていたぼくが信号が黄色の時交差点へ入り、交差点の中央で赤になってしまったのである。もちろん交差点を出る時は赤である。後のやつらを待っていてやるかと、左端に寄って、後をふりむいて止ると、一気に五人にぬかれたのである。（当然五人とも信号無視）「こんなことがあって良いのか、あいつらはん間か。」と、つぶやきながら、必死になって五人を追いかけ、十分ぐらいフルスピードで、信号や標識もろくに見ずに飛ばし、「さすがにここまではついてこれまい。」と、ふり返ると、五人とも、ピターッとすぐ後についていたのである。これでは、ファストランである。

あとは、もうめちゃくちゃである。藤沢に着くころまでに、信号無視を、いくつやったことやら。二十いくつまで数えていたのだが、あとはもうそれさえ、めんどうになってしまったのだ。おかげで江の島へ着いたのは四時前である。

第四章　江の島（えのしまえのしま）の朝日

四時前といえば、日の出までにたっぷり二時間以上あるのである。おまけに、自転車からおりると、すごい寒さである。江の島の公園のすみっこで、たき火をして、ふるえながら日の出を待ったのだ。

やがて、空がしらじらと明るくなり、しばらくすると、東の空半分が金色に光りだした。その朝やけの部分がだんだん狭くなり、明るさを増し、今にも朝日がのぼりそうになってきた。

みんな少しでも早く朝日を見ようと、寒い中を立ってずっと東の方を見ていた。ぼくなどは高いところのほうが日の当るのが早いと思い、藤だなの上に、むりやりのぼって待っていた。しかし、それから二十分たってやっと朝日の姿を見ることができたのであった。

長く待ったかいがあって、ひじょうに感動した。山の端から一点の光る点が出現し、ぼくらに一条の光をなげかけ、その点がだんだんと大きくなり、ついにお待望の朝日の出現となったのだ。

第五章　帰路（かえりみち）

ぼくたちは、あり余るぐらいのパンで腹ごしらえをして、一路東工大をめざして戻ることになった。　疲れた体をむちうって、藤沢まではたどりついたが、そこで六人とも半ばダウン。サテンでコーヒーとモーニング・サービスのトーストを食べ、二時間ぐらい仮眠をとった。それで少し元気をとりもどし、また自転車にまたがった。

横浜で、小島の友だちで東工大の学生だというロードレーサーの二人組と合流し、家にもどる小島をのぞいた全員で第二京浜をつっ走った。さすがに昼間は車の量が多くて、東工大に着いたときは、排気ガスと神経性疲労と肉体的疲労でくたくたであった。まったく恐怖のナイトランであった。

雑感

小野　賢治

大学に入って　相当暇な時間が増えるだろうと思っていたのだが、残念ながら毎週レポートその他に追われ、進級に関しての圧迫感も加わって、本当に羽根をのばすというわけにはいかない。サイクリングの方も、これまで、楽しかったこと30%　いやだったこと70%という具合で、何をやってもなかなかうまくいかない。他の人の中には帰に要領よく　うまくやっているんもいるようだが、自分はとてもそのようなわけにはいかない。そんな中で、道路地図や時刻表をみながら、旅行の計画をたてるのはなかなか楽しいことである。走るコースをいろいろと考えながら、また見ぬ土地の景色などを想像したりする。しかし　それらの計画も日程や費用などの現実的問題を考えると、ただの夢に終ってしまうことが多いのです。

旅の良さにもいろいろあるが　僕は特に、「めぐり会い」ということを挙げたい。旅をして一番印象に残るのは、いろいろな事物や人にめぐり会ったことである。都会で育ち、自然に対する感動があまりおこらない自分としては、「あそこで会った女の子は！」というような事が頭に残りがちである。まあ何でもいいからとにかく旅でなければ味わえないようなものを味わったなら、その旅行は成功だったということになるでしょう。

そのような楽しさを増すためには　ハードな

日程を組まず、ゆったりとした旅をしたい。
僕は「どこどこを見たいからどうしても
このような日程でいく」というようなこと
はあまりしたくない。明らかにつまらない
場所は別として、結構おもしろそうだと思
った場所なら、あまり細かいことを気にせ
ずに一日を決める。こんな有名なとこう
も見なかった、といったって、別にこまる
こともない。自分がよかったと思えば、そ
れで充分でしょう。

サイクリングの形式もあまり気にしたく
ない。どこかの自転車屋の広告に、「○○○
は輪行車を卒業したサイクリストだけが乗
る車です。」というのがあるが、そんな正統
派だとかいうことを気にする必要はない。
輪行という便利な手段があるのだから大い
に活用すればいい。一日の走る距離がどうして
も長すぎる場合には、何回か途中輪行してもい
いだろうと思う。そんな所で金がもったいない
なんていうケチな考えはしたくない。旅は「安全
快適」でありたいものです。

結局、「軟弱こそ最高」というのが私の考えな
のであります。

「サイクリングを始めて」

佐藤恭輔

東京へ出てきて、一人暮しを始めて思ったことは、だれもが思う　寂しいということであった。学校へ行っても、今まで一度も見たことのないあまりかっこいいとはいえない男の人たちばかりであった。色気のない学校が、これほどまでに味気ないとは思っていなかった。アパートへ帰れば、一人きり。冬でも、電燈なしでは暗すぎるのである。こんな中で暮らしていたら、いつかは、ノイローゼになるんではないかと思い、適当であると思われたのが、「サイクリング部まであと四十三歩」が目印のサイクリング部であった。

サイクリング部のドアをたたいての第一印象は、「きたない」ということのみであったが、サイクリング部についての心躍る説明には感心した。たった一人のぼくに、写真集だとか、部誌などを見せてくれた。部自体は、かなり統制がとれているんだろうと思った。サイクリングを知らないぼくでも、その楽しさがなんとなく感じられるような気がした。

新歓ランは、ただ走ることに精一杯で、あんなに辛いものだとは思っていなかった。自転車で九十キロメートルも走ったことのなかったぼくには、九十キロメートル走ったんだと地図をながめると、十分な満足感が得られた。部室でのビールもうまかったなあ。つまみが少々たらなかったが。

新歓ランが、走るということのおもしろ

「さて教えてくれたとしたら、予備合宿は、みんなで、走る楽しさと、自然の持つ魅力のすばらしさを教えてくれた。キャンプして、ごはんを作ったり、シュラフの中で寝たりしたのは、初めての体験であった。苦しいながらも初めて立つかすんだ峠、朝日の中で見る静かな湖、これが、人を旅に憑かれさすのであろうと思った。北海道へ行けなかったのは残念であった。写真で見ただけでも、すばらしい景色である。

秋休みに行った伊豆半島もすばらしい景色だった。南伊豆は、一～二年前にマトがレッ トラインが完成したばかりで、まだ公害などとは、縁遠い。海の青さといい、松やみかんの木の美しさといい心を打たれるものばかりであった。又、初めて泊った、ユースホステルや、心暖まる歓迎をうけた民宿も、大きな発見の一つであったろう。伊豆半島周りは、曽我部君と行ったのであるが、初めの地図を見ながら立てる計画は、ひじょうに苦労した。まだ、はっきりした距離感がないため、百キロとはどのくらいなのか、峠の十キロとはどのくらいで時間的にどうなのであろうということが、わかるはずもなかった。事実、2日目、ある程度は予想していたものの、道路の起伏の激しさのため、当初の計画していた道のりを走行できなかった。計画のむつかしさを痛感したのであった。

サイクリングは、日ごろの運動不足を解消するためにも、新しい自己を発見するためにも、手ごろに楽しめるスポーツである。できる限りサイクリングを続けていきたい。」

サイクリングについて

東京女子大学一年　相沢芳枝

私は、何故自分が東工大のサイクリング部なるものに加わっているのか常々疑問を感じていたのですが、この原稿を頼まれた時点においてますますその度合いを増したようです。しかしいつもはずみで生きているこの私がこれ位のことで悩むはずもなく、ダラダラと現在に至っているような次第です。実際私は、他の二人がハケ岳から無事帰ってきたら自転車を買おうと思っていたわけで、二人の元気な姿を見たら急にしゃくにさわって自転車を買う気になったのですが、おまけに少しぐらい重くてもいいからもう少し安くして欲しいなどというみみっちいお願いをしたのです。それにふさわしく私の自転車も東工大の方々（部長さんを除く）がエ大祭のドサクサにまぎれて、あれこれイデオロギーを闘わせながら全くの独断と偏見によって作って下さいました。たいへん失礼なことを申しあげましたが、まあこういうわけで多難なスタートを切ったのです。しかしまずオーに輪行ができないわけだから、わざわざ日曜日に講習会へ少しオーバーですが）を雨にてもらい、下宿まで道がわからないので送ってもらってやっと自転車に乗って帰ってきたのです。ことわっておきますが、私はこのとき生まれて始めてドロップハンドルなるシロモノに乗ったわけで、体は前にのめりそうだし、足は地面に届かないしよく無事に帰ってきたと自画自賛しました。こういう経過でついに三浦半島に連れていってもら

えたのですが、前日睡眠のあまり寝むれず体調がサイクリングには問題ありませんが、悪夢のよ
三時に起きて支度を始めるという始末で、はり
きって逗子の駅に着いたのです。しかし元気だ
ったのはここまでで、いざ走り始めると不思議
にも坂などというものが現われ最後まで苦しめ
られたわけです。そして一回ついに坂の途中で
止まってしまい後で自己嫌悪に陥ってしまった
のです。おまけに東工大の方にあんなのは坂と
は言えないと心臓をえぐられるような厳い言葉
をあびせられ、しばらく後遺症が続きました。
こんな具合いで皆さんに迷惑をかけっぱなしで
シコシコと家に帰ったのです。走りながら景色
を見る余裕などなく、ギアを変えたまま平らな
道を走りカラ回りばかりして笑われるし、注文
した五目そばはなかなか来ないし（これは全く

うな一日でした。さぞかし東工大の方々には迷
惑であったろうと本当に申しわけなく思ってま
す。などと言いながらも本人は結構おもしろか
ったとかなり自己満足しているのですから救い
ようがありません。実際走ってみて感じたのは
体力のなさとおまけに根性がないこと二点に尽
きます。だから春休みには徳島に自転車を持っ
て帰り、少し鍛えようと思っています。おまけ
に四国一周したいなどと恐ろしい計画をたてよ
うとしているのです。
最後になりましたが、これからも我々三名を
よろしくご指導のほどお願い申しあげます。
さらに、この原稿を吉祥寺から恐怖の還七を走っ
て持ってきたことを報告し筆を置きます。

東京工業大学サイクリング部皆々様

前略。

初めてお便り差し上げます。

〝サイクリングに関する事〟と言われて用紙を受け取りましたが、「何を書いたらいいのかしら」と思いあぐんでしまっている私です。

東工大のサイクリング部に入部させていただいてから現在（十二月）まで数ケ月経っていますが、参加できる機会を作ってくださったにもかかわらず、私が参加したのは、八ケ岳でのサイクリング一回きりだし、輪行は今だにできない！まったく「サイクリング部の部員として、これでいいのかしら」と我ながら情けなくなってしまいます。

〝情けない〟と言えば、私は自分の体力のなさ、力のなさをサイクリングを通じてつくづく感じさせられました。

八ケ岳のサイクリングに参加した時です。確かあの時は最初から上りの坂道で、私は十分とたたないうちに止まってしまったのです。

「こんなはずではなかった」といくら頑張ってみても私の自転車は動いてくれないし、疲れてくる！　同伴してくださった方たちは悠々と走っていらっしゃるし。「どうしてこんなに違うの？」などと、嫉妬と羨望とくやしさと情けなさを含んだ横目で東工大の方たちを見ながら思ったのです。男子と女子の違いということもあるのでしょう。そのようなサイクリングをしたのが初めてだったということもあるのでしょう。でも、そんな事を考え合わせても、おまりの

自分の弱さを嘆かずにはいられない気持ちです。

今まで、自分の体力や体を使って頑張る事(?)に関して、他の女の子達よりも少しは強いつもりでいたのです。ですから、あんな坂を登れなかったに自分に驚いています。まして、自分が走った道のりを普通に走る人の三倍以上もの時間をかけて走った(走った、というのはあまりにもおこがましい気がしますが)とあっては、ますます情けない思いになってしまいます。

実際にサイクリングをしてみて、自分に関してこのように情けなさを感じながら、改めて、「サイクリングには強い体力がいるぞ」ということを感じ驚いています。

走る時だけではありません。「まず、自転車を運ぶことからそれは始まるのだ」という恐しい(?)事実に気づいたのです。

"あの自転車のナント重いコト、重いコト!"

三十歩も歩くと投げ出してしまいたいくらいの重さ!あれを持って列車に乗り遅れないように走ったことがあるという話を聞いた時、何と驚いたコトでしょう。「これを持って来る…?冗談はやめて下さい。」と言いたいくらい驚いたのです。

何はともあれ、今の私がサイクリングをするにあたって課せられている事は、「体力作りをするコト。」と「輪行を覚えるコト」でしょう。

"輪行"などと、この私が図々しくも簡単そうに口にしていますが、部分部分の名称さえ全く分からないのです。「まして"輪行"などとても」もう、という状態でサイクリング部に在籍して

いるのです。驚くべきことです。

"サイクリング"という事には、いろいろな意味と価値があるのでしょうけれど、今の私には"サイクリング"が前に述べたように体力作り(非常に大変なスポーツであるということ)と輪行を覚えることにおいてのみ意識されていてクシ淋しい気がします。反対に以前の自分は甘かったのだ。ということも分かっています。でも、さっと除々にそれらからも解放され、本当にサイクリングを楽しむことができると思います。八ヶ岳に行った時も、とても大変ではあったけれど、それなりに楽しかったのですから。

秋にあちらこちらで大学祭が催されましたが、私は二つの大学祭に遊びに行き、ついでに"サイクリング部"を訪問(?)して、つあの女子のあはいらっしゃいますか？どのくらいの活動を…」というようにクシお話を聞いてきたのですが、あいにくどちらの部にもまたまその場に女子部員の方がいらっしゃらなくて直接お話を聞けなかったので残念に思いました。でも、そこに居らしたかたちのお話によると、一方の大学では女子もかなり頑張って走っていらっしゃるようで、「僕が入部した頃はいつも負けていた。」と笑っていらっしゃる方もありました。私はそこで感嘆とも驚異とも つかないタメ息をついて帰ってきたのです。

もう一方のサイクリング部では、女子はそれほどの活動はなさっていないようでしたが、それでも中には、もう何年も走っている方がいて

日帰りできるように、真夜中の二時　三時に一人で出かけられる方がいらっしゃるという話をうかがいました。それでも、又、私が大きな夕メ思をついたことは想像に難くないでしょう。

けれども、これらの話を聞いて、「女子でも結構立派に(?)やっていけるんだなァ」なんて気がとり直し、「自分も頑張れば東工大の方たちと同じように走れるようになれるのではないかしら」などという希望をおったのです。(実は男子と同じように走ることはできないのでは、ないかとおそらめかけていたのです。)「たった一回のサイクリングで…」とさげすまないで下さい。私はマジメにそう思ったのですから。

でも、これからは多分大丈夫。

私が皆さんと同じように走れるようになるのはまだ、ずっと先の事でしょう。けれども、私は私なりに頑張ってみたいと思います。

ご迷惑になることも多いかと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

皆さんと一緒に走ることを楽しみにペンを置きます。

かしこ

(十二月七日現在)

東京工業大学サイクリング部皆さ様

東京女子大学一年　秋山京子

〔追伸〕

悪筆悪文にて失礼致します

今までを振り返って

2年　金谷　健

まずクラブに入った動機から。

高校（茨城・古河三）が自転車通学で、学校まで六キロを五段のスポーツ車で毎日走っていた。とにかく朝のさわやかな空気の中を走る爽とは、実に気分のいいことなのだな。特に春なんか、道路の両側の田んぼや畑が一面の緑で、その中をゆっくりゆっくりペダルをこいで行くことが、なんとも言えず楽しかった。友だちや先生（何人か自転車でギリコギーコと学校に来る先生がいて、そんな先生がオレ好きだった。）のバカにしたような顔にどんどん抜かれて、毎日のように遅刻（2年の時は100回以上したような気がする。すでに先生の来ている教室に入っていく時の緊迫感が、何ともいえずよかった。）していたのだが、逆にそれが余計にいい気分にさせてくれるのだった。オレはとても時間を有効に使っている気がして……。もっとも、3年になって〇〇ちゃんという、アグネスラムと木之内みどりをミックスしたようなかわいい女の子を好きになってからは、その子に会いたくて一度も遅刻しなかったっけ。

そんなわけでオレ、とにかく自転車に乗ることが自体がとても好きだったし、これといってスポーツも得意ではなかったから、大学に入ったらサイクリングでもやろうと思っていた。ただ、何日も一日中走るという事が、どのくらい疲れるのか、まるでわからなかったので体力的に不安があったし、すごい不器用で機械いじりが苦

まだったので、その点も不安ではあった。

そして、そのころはこう信じて疑わなかった。

「自転車は、気楽に、のんびりと、ゆっくり走るものなのだ！」

＊クラブに入ってみて。

4月末に早くも　わが愛車「ケルビム」が出来た。実はそれまで普通のスポーツ車にしか乗ったことがなかったためか、最初こう思った、

「こりゃ速い！こげばこぐほど、どんどん進む」。

それで次第に高校のころと考えが変わって、

「自転車は、速く軽快に走るものなのかもしれない……」。

と思うようになった。

オレはどうも新しい環境になじむのが遅くて、大学やクラブになじむのに一年かかったような気がする。もちろん部員いとりいとりがどのような考え方をする、どのような性格の人間なのかを、全てわかったとは言わない。ただ、どのように接するべきかは、なんとなくわかったような気がする。

＊サイクリングの魅力について。

まずサイクリングと旅の関係について。オレは旅の本質は、見知らぬ人との出逢いにあると思う。旅に出ると誰にでも話しかけたくなる。そしていつの間にか、いろいろと語りあっている自分に気づく。でも、もう2度とこうして語りあうことはない……と感傷的になる。だからこそ、しみじみと語ろうと思う。そこに旅の本

質がある。

加にサイクリングの本質は、ペダルを踏みこむ時の感触にある。それが何ともいるずいいなら、何日も走れるのだろう。それが根底にあって、次に周囲の風景（目的地の風景というよりは、走っている途中の、ペダルを踏みこんでいる時の、まわりの風景）が大切なのではないかしが問題になってくる。その次がダウンヒルの軽快さかな。とにかく、オーにペダルを踏みこむ時の充実感、生の発散にある。この点でサイクリングはスポーツと言える。そして、いとつ言えることは、このようなサイクリング本来の喜びを十分に味わえるコースは、そう多くはない、ということだ。阿蘇や野麦峠のように、もう一度走ってみたいと思うところは、なかなかない

と思う。峠の場合、標高差、距離、勾配、路面状況、周囲の風景、交通量、季節、天気など、いろいろな要素がかかわってきて、いいところはなかなかないのだ。

さて、サイクリングと旅の関係だが、サイクリングに旅としての要素を持たせようとするならば、ソロが最適だと考える。そうでなくて、サイクリングに部室の延長的なワイワイという雰囲気を持たせようとするならば、気のあった仲間と行くのがいい。何人かで行くツーリングは後者において、ややサイクリング自体に重きをおくべきで、合宿は逆にやや部室の延長的な雰囲気に重きをおくべきだろう。そして、スポーツとしての性格を前面に押し出すなら、タイムトライアル的になるのだろう。

だから、この4つのサイクリングを、各自の性格や体力や金力に応じて、うまくバランスを保って、行なっていくことが大切なのだと思う。どのサイクリングにも魅力があって、どれが一番いいとは言えないと思う。

※これからのことについて。

サイクリングは各自の体力に応じてやればよい。トレーニングはしなくてもよい。このように今までは考えがちだったが、最近体力の低下を身にしみて感じてきて、体力を維持できる程度のトレーニングは、サイクリングの喜びを味わう最低条件だと考えるようになった。やはり週2回のトレーニングは欠かせない。これはクラブのまとまりという点でも重要だろうが、それ以上に、オレ個人の体力維持という点で参加したい。

最後にクラブの現状については、一応満足はしているが、サイクリングに対する考え、クラブに対する考えというものについて、部員間の話しあいが少なすぎると思う。何も考えが一致する必要はないが、各自の考えというものを確認しておかないと、具体的に合宿やツーリング、月例ランなどについて話しあう場合、どこかチグハグになってしまうと思うのだ。

以上

負けてたまるか！

―走りに徹しきれない男達への とってもシビアな考察―

沢大 至

時として、サイクリングとは非常に孤独なものなのです。特に坂を登っている時、足全にひとりになってひたすらにペダルを踏んでいる時、皆はいったい何を考えているのでありましょう。それでは、今までの経験からいろんな人達が坂を登っている時に何を考えているかを想像で書いてみましょう。

まず金谷、あいつは簡単です。「うーん、よし！ヤッケを脱ごう!!」次に日比野さん、パンを食べながら、「うーん腹へったなあ、パンでも食べようかなあ、」とかし登りながら食うのは大変だなあ」藤原さんは、「フン、メ〇！負けてたまるか!!!」名取は、ちょっとむずかしい。「えーいもうヤケクソじゃん！焼肉？くさいだろうなあ。」というところでしょう。宝谷と栗原は簡素で、宝谷「ギョニー!!」栗原「グブグブ～」屋田はどうせたいした事は考えてないに決まってるがあえて言うと「うーん、メゲルなあ。休みたいなあ、何か休む口実でも探そう。そうだ、デイレーラーの調子のせいにしよう。」次、小柳さん「ヒザが痛いなあ、痛いなあ！」一年の鈴木「わあーすごい坂だねえ、大変だねえ。」一年の小島「あっ、シビアな勾配じゃ、ギヤを30に入れてしまおう。」若根さんは、正体不明をがらも まあ「うーん もよおしちゃった。」

いう所でしょう。野崎さんの場合は、「あーっ！すごい勾配、ステキ！　もっといじめて！」という感じでしょう。残りの人達のことはまとめかりませんので　不明者の代表　柳さんに登場してもらいましょう。「オイ！たまには、もっとゆっくりと登ろうぜ！」（あまり他人のことをシビアに書くのは、さすがの私としても多少気が引けるので私の分は、皆さんかってに書いといて下さい。）さて最後にいよいよ登場、沢木君は、「」

この中で、藤原さんの「フン、XO！負けてたまるか!!」というのは、もちろん他人に負けてたまるか、という意味ですが、この考えには非常に同感であります。坂道を登ってこいて、ペダルを踏む力のささえとなるのは　やはり私へ場合にも負けてたまるかという気持ちなのです。他の奴も同様に苦しいんだし、そんな時自分だけのんびりと休む程ずうずうしくない私のような人はきっと、どんなに苦しくてもがんばって登り続けるのではないでしょうか。

この負けてたまるかという感情はようするに

」

と考えていることでしょう。エライですネ！

しかし、こんな事を書いていてはなかなか本題にはいれないのでそろそろ本題にはいりましょう。

かなり本人のプライドの問題なので中には　小柳さんや宮田などのように、ダウンヒルにおいて、負けてたまるか！という感情を車に対して発揮する人がいるのもまた当然であるのです。

また、我部ごはこの感情がさまざまな面によく現れているのが注目すべき点なのですが、例えば合宿中を思い浮かべて下さい。あの食事を。皆、必死に食うどころではないですか。なかには自分が嫌いで食べれないものを「人に食べれるぐらいなら死んだほうがましだ。」と無理矢理食べこしまう人もいるのです。まさに合宿とはすべてこの面ご厳いそのものです。なんと執念深い人達の集まっているクラブなのでしょう。それでは、それが如実に現われた今年の春合宿その他班の人々の食事にたいする考え方を 例によって独断と偏見ご書いてみましょう。

まず日比野さん「気合いさえあれば いくらだって食えるのだ。」「お姉さん、大盛ライスもう一杯」 うーん、なんといっても食事は、安くこ量が多いことだからねえ。とう竜神橋食堂がいい。」金谷は「オレ、食欲ないんだよ。」「おばさん、この生卵焼いてもらえますか。それからライス大盛2つネ」そう、竜神橋食堂のあの娘とうしたかな？ でもあの食堂 ギョーザがいつも品切れだからダメだよ。」藤原さん「いやあー、日比野と金谷には まいったよ！」と言いながらもさすがに抜けめなく小柳さんの刺身に目をやる。小柳さん「いやだ！こんな生活はいやだ。」と言いながら 大嫌いの刺身をすばやく飲み込んでしまう。堀さんは「キチガイか！こいつらはまったく食うことしか頭にないんだから。」と言いながらも皆につられ、ライスを3杯食べてしまう。溝口さんは「いやあ、僕は別にとんなにたべてないよ。うん」なんて口では言っても

軽く2人前はペロリとたいらげてしまうように、お茶をすすっている。そして沢木君は「うんうん」いや、自分の目の前にある食べ物をただひたすら食べているだけですよ。何しろ食べ物を残すなんていうのは沢木家の恥ですから不。と わさびじょうゆを飯にかけて食べている。

この栄光の7人、春合宿その他班が教えてくれたことは、人間やろうと思えばドンブリ飯の5杯や6杯、或いはオヤンボンに出うどんなんか簡単に食える、という事実である。そう、食ってやろうと思えば、実に驚異的な量の食事を腹におさめることができるのです。

自転車で必死にペダルを踏む、苦しい時には他の奴に負けてたまるかと、気合いを入れて走ることは、非常に苦しく、疲れるものであると共に、非常に腹の減る重労働でもある。負けるものかとペダルを踏んだんだ、負けるものかと飯を食ったっていいじゃないか！ 私の言いたいのは要するに、このことであったのです。わかっていただけたでしょうか。

しかし、ここまで来て私には、一つの大きな不安があります。それは、ソロで走ったらいったいどうなるのだろうという事です。たくさん人がいるから、休まず登れるし、恥ずかしくもなく食堂で飯が食えます。しかし一人となるとそうはいきません。それが恐ろしくて私は まだ、ソロツアーには行ってないのですが、どなたかのアドバイスを待っています。ーおわりー

（この文章はフイクションです。文中の内容への抗議等は、いっさい受け付けません。）

私とTITCC

―この一年と七ヶ月―

冨田 尚

〈出会〉五月二日

いったん入ったテニス部があまりにもつまらないので もう絶体自転車は手にしないと誓ったのに、サイクリング部に誘われる。入るとハさなりベニテに座らせられる。余に、ハイライトを出すと、すかさず 堀氏が百円ライターで火をつけてくれた。この事が私を入部させた第一の理由であった。というのも、テニス部のあの封建的体制とは全く違った、自由で明るい雰囲気が、あまりにも私には新鮮で 大変らしさというものを感じさせた。〈今でもこのムードは崩されていないと、又 崩してはならないと祈っているがどうだろう。〉

〈初夏〉六月×日

五月十日の予定がストのため のびのびの新歓コンパ。新入の家族もいる。スロープでの堀氏の大熱演 名取のバカ騒ぎ（失礼）が今でも目に浮かぶ。この頃 水上のトレーニングがいやなものだった。根っからあくのを走るのが嫌いなだけにクラブは楽しいがトレーニングだけは……

〈予備合宿〉七月十七～二十日

新入の牛村氏をはじめ 総勢十三名 この時それまで抑いていた自転車に対する憧憬が一挙に覆えされた。押して歩くことはなんの抵抗もなかったのだが 只それまでは 自転車は 軽快にそして楽に走れるものだと考えていて、又それに忠実に走ってきたのだったが、なんてこんなに重

いものをつけて走らなければならないのか、
これでは、全く無味さというものが失なわれ
てしまう、クラブランはこんなものではない
等と、これまでの考えにことごとく反発する
現実に疑問を感じ、その現実に無理な目命を
付き合わせようとしてきた目命に、怖気がさ
してきたのだ。これまで、登りでは下る楽し
みだけでなく、登ることそのものに楽しみが
あった。が、明神、三国では全くそれが味わ
えなかった。

〈夏合宿〉八月十五日～三十日、

すでに卒業した藤君氏、特別参加の仮宮氏
氏、そして野崎氏、の四名。一年は私だけ
四人中メガが三人もいるし、編成のない地雷
を抱えたが、予備合宿での疑問に対して、未
だその答えの得られない私にとって、正統派の諸
氏といっしょに走ったことは、非常に参考になっ
た。いづれも健康派である故、他の班とは一味ち
がった合宿であったと思う。又、四人がそれぞれ
ソロで十分走れるだけに、互いに自命の走りを主
張し合うため、口ではしないものの、自ずと、バ
らばらになり、全員で走ったのは最後の日だけ。
感動的だったのはやはり、集合地で日に焼けた仮宮
と会った時。それぞれが個人の体験を、いかにも
自命が一番すばらしい体験をしてきたのだという
雰囲気で話し合った事である。

〈秋〉

夏合宿も終わり、部になじんで、一年が目命の
個性を表わしはじめた。仲間とによくラッ〇〇沢
木、絶壁ダンスリの栗原、何を考えているかわけ

このわかうん合宿　マラソンそうで来は…の名取、マラソンそうで一応マラソンな生活。責任もなく好き勝手にできたこの頃は楽したのしかった。土大祭の後は、この七人が兄弟のような、そんなムードでよかった。

〈冬〉

前期に少し遊びすぎたため、それを取り戻そうと一月、二月は勉強に力を入れた。だが現実はきびしかった。

〈春〉

新入部員がどっと入ってくる。ESCA理事である上、企画局長をやらされ又、男女ともも手を焼けたためか、全く手の付けようのないほどせわしくなってしまった。一年には早く部になじんでもつおうと、又、部員としての自覚をもってもらおうと努力してみたがなかなかうまくいかない。今になって思えば、永っておくのが最善であったようだ。

〈夏〉

予備合宿、夏合宿と、あまり印象深いものは残っていない。なんとなく、すべてが義務的に済ませてしまった感じがする。楽しむということがなくなってきたようだ。これは春ごろから感じはじめていることなのだが一つには、学科部局のことがあると思われる。化学科に入ってしまって勉強を全くやる気をなくしてしまった。サイクリングに関しては、一年のときに変りかたられた私のサイクリング考を無理に押し進めようと、意識してきていたのかもしれない。そして合宿での事故、これで私は全くリーダーとしての自信をなく

してしまった。野崎氏とも話してはみたが、解答は出なかった。又 私の意見が一年たうすく伝わらなかったのか、どうもそれに対する反応が感じられずに考えこんだりもした。そんな、こんなで、最近までもがいつづけていた。やっと、それは考えすぎであるという一つの安物薬を見つけはじめた、しかしどうもしっくりこない。

〈秋そして今〉

東女ラン、富士TT、十一月月例ラン、と大イベントをこなした。このタイムトライアルで久々に感動したのは山頂で全員が集合したとき この皆の満足そうな顔を見たときであった。いろいろと地獄はあったものの 成功したのだ、という実感がありありと感じられた

一言加えるなら参加者がやや少なかったのだ。たこと である。それと反して十一月月例ラン はなんだ XO! この一言につきる

TITCC Nao

野坂

「ぴりとまんぐ」

富士スバルライン・タイムトライアルについて書けとの御達しだが、時間もないし僕が今考えていることについて、勝手気ままに書きつづることで許してくれたまえ、何しろ勝手に書く程、楽な事はないからな。

さて、僕は、今年一年間、部長を務めて、それからも解放されほっとしているところだけれど、グータラ部長だったことだけは確かだと思っている。今になって考えてみると、部長なんか僕には最も不適性だったのではないだろうか。人にはそれぞれ適した役割が

「あって、自分にあった環境にあって初めて」人は能力を最大限に発揮できる。そのように考えると、僕を部長にしたのはみんなの最大の失敗なのだ。

閑話休題。自己批判はこれ位にして僕が自分なりのサイクリングの方法について考えていることを書こう。僕には、クラブランよりもソロランの方が自分に向いているような気がこの頃する訳。もちろんクラブランなんかでワイワイと楽しく走るのが好きな向きもあるうが、これからあくまでも、僕の独断と偏見に満ちた考え方を述べてみたい。クラブランとソロランは、全く違うディメンジョンを持つサイクリングの方法だと僕は考え

「である。旅先での人との出会いがそれだ。」

合宿では、仲間意識が強くなり過ぎて他人と馴めないものだが、孤独な人同士は引力のように引き合うものだ。

例えば、秋の試験休みはソロランにまさに打って付けの季節である。10月上旬では、標高2000m以上になるないと紅葉が見られないのが残念だが、観光地には人影もなく、空はあくまでも高く澄み、まるで世界が自分だけのためにあるような錯覚に落ちる。行くも止まるもソロだから勝手気ままである。

僕は、去年・今年と2回秋休みを利用して、ソロランに行ってきたが、どちらも素晴らしい旅だったと思う。特に今年

「でいる。クラブランは、合宿に代表さ」れるように、仲間同士で走る気楽さ、共に食いかつ寝るといった親密感があり、大学生活の重要な人間形成の場を提供してくれるだろう。それに反してソロランは、孤独に耐えて走らなければならない。もちろんサイクリングとは、走っている間は、ソロであろうとクラブであろうと孤独であるのだが、感動的な場面に出会っても誰も語り合う友がいないのは、非常に寂しい。つまり、目に写り、耳に入るすべての物事が心の中に静かに沈澱し、堆積するような、自己陶酔型あるいは、自己確立型の旅なのだろう。だが、ソロランには、それなりの良さが

「の場合、ツーリングとしては失敗した
が、一人旅としては収穫が大きかった
ソロランだった。なぜ失敗と考えるか
と言うと、それは八ヶ岳という山と、山岳
サイクリングに対する認識が甘かった
ことに尽きる。北八ヶ岳は自転車でも
行けるという「マーサイクリング」の記事
を読んで今回のツーリングを計画した
のだが、それは、八月の安定した気象条
件と、充分な体力の条件と、綿密な
調査があって初めて可能になるので
ある。試験直後の消耗した体力と、
夜行列車での睡眠不足と空腹とで
松原湖から夏沢峠までの道程のは
とんどを自転車を押して歩いたので

「ある。(決して自転車に乗れない道では、
ない。)そして峠の山小屋に転がり込んで
から10分もたたないうちに横なぐりの
強い雨が降り始め、そのうちに雪に変わった。
もうちょっと到着が遅れたら、体力の消耗も
激しかったし、ひどい目に会っていた事だけ
は確かだ。翌日は雪の中を一日中、自転車
をかつぎ続けてるす前に麦草ヒュッテ
に着いた。結局、北八ヶ岳縦走は、登山地図
のコースタイムの二倍位かかった。その位、自
転車をかついでの登山だから当り前だと
思うかもしれないが、出かける前に僕が
考えていたことと言えば、北八ヶ岳位なら
自転車の乗れるところもあるだろうから、
コースタイムより早く着けるだろうなんて

「考えていたのである。それに僕がかついだ
コースは、登山地図には危険なんて文字は
どこにもないので安心していたのだが、どっ
こい、自転車をかついでいると体のバランス
が崩れるので、何度も危ない思いをした。
その辺を充分に考慮すべきであったと
思う。悪い条件が重なれば、遭難と
まで行かずとも大怪我は避けられな
かっただろう。山岳サイクリングに対する
認識が甘かったとしか言いようがない。
しかし、一人旅という面から考える
と、大阿原ヒッチの変なおじさんや、
そこで知りあった連中とは今でも文通を
しているし、麻雀の封切りはやらせてもら
ったし、夕食を自分たちで作ったりで
クラブランとは違った楽しみがある。
ソロランで得るものは、自己満足に過ぎ
ないかもしれない。しかしそれでもいいと僕は
思う。唯、他人に不愉快な思いをさせな
ければ、色々とソロランについて書いて
きたが、こんな旅が出来るようになっ
たのも、クラブでの活動を通して得た
経験の積み重ねの結果である。つまり
クラブには、クラブの流儀というものが
あり、僕の指向している流儀が、クラブの
と少し違ってきているような気がする
のだ。僕は、これからもずっとサイクリング
を趣味として大事にして行きたいと
思っているが、その方法を模索するとき、
個人々々によって独自の流儀が存在する

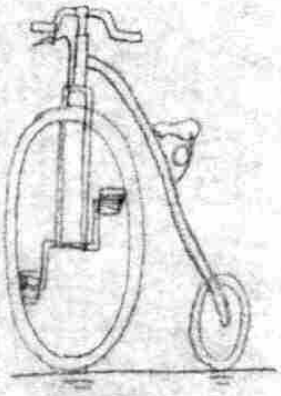
野崎

「と思う。クラブの流儀に従って我々は」活動をしている訳だが、いっかそれだけでは満足できない時が来るのではないだろうか。よく聞く話だが、大学のクラブ（この場合はサイクリングに限らない）に入っていても、卒業してしまえば「ハイ、さようナラ」といった人が多いと言う。入部する動機も色々とあるだろうし、一概には言えないが、もっとクラブでの活動を卒業後も続ける人が多くてもいいのではないだろうか。僕らのやっているサイクリングは、ある意味において最も身近なスポーツではないのか。そういったとき、自分なりの楽しみ方を見い出していることが、サイクリングを続けていく上で大きな支えとなるのだと思う。そう言った意味では、サイクリングに限らず、何でも良いのであって、常に何か新しい物を求め続けていく気持が大切なのである。僕はこれからもずっと、社会に出てからでも、自転車に乗り続けるつもりだ。何かを求めて。

乱筆・乱文にて失礼

1976.11.30.

野崎　信春



――ある日の部誌――

☆10月28日(木)　朝9時15分

1時間目の英語が休講なのだ。前学期単位を落とした英語だから今学期はがんばろうと思って、昨夜一睡もして朝早々出て来たのだ！

工大祭もいよいよですな。1年生はがんばって欲しい。こういう事を機会に団結を増すのはよい事だよ。徹夜するのもいいと思うけどな――。さて2年生は工大祭の時、何をしたらいいのでしょう。個人的希望を申すと、工大祭は信頼ある勇者ぞろいの1年生に完全にまかせて、遊びにいきたいな――。

P.S. だれかダンゴ屋へ行こうよ。　(角取)

☆11月9日(火)

悩(たの)しかった工大祭も終わり、冬です。トレーニングの季節です。諸君、明日にそき、とトレーニングをやるぞ。全員出席せよ。自動車学校はキャンセルせよ。なお、日吉自校のキャンセル料は500円です。明日はトレーニングを圧倒的に実現する。とにかくやるのだ。見よ、この固い意志、たくましい肉体…(ここでセントマッスル登場)

「世界は一家、人類は皆兄弟。健全なる肉体には健全なる精神が宿ります」

と云っているうちに笹川良一が出てしまったので、明日は雨が降る予定です。　(古木)

8月の乾いた砂

永瀬　悟

8月の乾いた砂なんていう題名を見ただけで心が浮きたった人には悪いんだけれど、これはポルノでも煽情小説でもなんでもないんだなあ。サイクリング部に3年半前にはいってから頭の中に最も強烈に焼きついているのがこの8月の砂なんだから。別に月や季節が変わったからといって砂自体が変わる訳じゃない。砂は砂であって、せいぜい雨に濡れているか乾いているかの違いがあるだけ。思い出に残っているのは湿り気一つない砂で、それをたまたま8月に見たものだから題がこうなったわけ。

道を自転車で走っていると(自動車をころがしている時には絶対にわからない)時々光の加減できらきらと輝いている砂を見かける時がある。自動車の轍やら風に追いやられて、ある特定の場所に砂が集まっていてそこだけは他のアスファルトの部分とは全く異なった雰囲気をかもしだしていたりする。真夏のさんさんと降りそそぐ陽の光をあびている時なんか最高なんだなあ。ただその最高さがその時はかりは180度ばかり向きを変えていて全くの裏目に出ただけ。

話は、去年の夏、東北合宿の半ば頃のある日、普段は最後尾の監視役ばかりやっていたのが何を血迷ったのか、先頭の方を走って坂道を下っていた時のこと。たまに

前に出ると単純に嬉しくなって速く走りたくなるもの。スピードを少しばかり出して下りの急カーブできらめく砂に見とれて砂の上で左手をほんのわずかばかり何気なく握りしめただけ。すべるかなあ、曲がれるかなあ なんて思いながら。いまだに恥ずかしくて一緒にいた人間に聞けないのは次に自分が目をあけるまでにどの位の時がすぎていたかという事。本人は数秒でわかると信じているのだけど。とに角気がついて いの一番に気にかかったのは、乗っていた自転車。こう書くと えらく立派に見えるけど、本心はそんなもんじゃなく、自転車さえ これ乗れていれば もう乗らんでヒッチハイクでもして 不良腐れて帰るのを期待していたんで。人間様に比べて 自転車をどうってことないが見た時の気持ち。わかってもらえないだろうなあ。そんでもって仕方なしに最寄の駅へ たらたらと向かっているときリストさまのお墓なんていう素敵なものがあって、ここで奇蹟かなんかが ぱあーっと起きて体力回復すればめでたしめでたしで一件落着なのに。あるわけがないんだよなあ。そんなこと。なおせるのは やブでもなんでも 近代医学であって自転車屋なんだよ。今じゃ笑い話なんよ。あの時は何十回も死んだような気になったけど。

今は幻の女子部員として

4年 夏目 幹子

どういう因果で こうしたものを書かされる はめになったのか 根源を訪ねれば、時すでに 4年も昔に遡ざかり、今はただ名ばかりの部員 に原稿書かせる弱体なクラブにはいった事を不 運に感じる。とはいえ、この4年間、桜の花が 咲く季節には必ず、実に数少ない女子新入生を 見つけては、入部の勧誘にてぐすねひいていた 事を記しておきたい。聞くところによると何せ らこのクラブにも花の女子部員がはいったとか 十分に気を配り大事にしていただきたい。

ものぐさな自分にとってきっかけを作るのは 思いのほか大きな負担と活力を要求されるもの。

私がサイクリングなるものに、今だに愛着を覚 えるのは、おおよそこのクラブがきっかけ高 易に作ってくれたためであり、自づからその地 味を味あわせてくれたためであろう。

なよやかな女性が、男ばかりの蒸さ苦しい部室 に我が物顔で居ちつくのは、かなり心臓にも を はやす訓練がいるけれど、一端戸外にいでて、 同じ道を走り、同じ飯盒の飯を食べているとそ のグループがむくつけき男子ばかりとはいえ、 不可思議なふん囲気からするりとのがれられる のはおもしろい。サイク旅行の効力ともいうべ きか。一般に旅ゆけば、身心ともに日常生活の うさから離れ、開放された気分になるもの。が 特に、サイクではその良さがわかる。好きな時 好きな所へ行け、宿の心配もしなくて済むとい

うのが実にいい。気楽なのが一番いい。その分テントだの寝袋だの食糧、炊事用具等いっさいがっさいを自分の力で持たねばならないのはつらいが、この気楽さにはかえられない。むろん、私は弱き女性であるので、全装備30kgで野宿というわけにはいかず、しかたなく安いユースなどを予約するのであるが、これがもういけない。第一に目的地までなにがなんでもいかなきゃならないという気分が働くからである。サイクの良さはより道、の自由さにあり、本当に楽しもうとするなら、重い荷物もなんのその体力をつけねば。去年の北海道で出会った人などは、驚くほど何でも持っていて家財道具ごと自転車にくっつけた感じ。私などはそれまで、軽ければ軽いほどいいと思った構造な反対で必要最小限の荷物しかもっていかなかったが、彼とみていて、「若いあれば軽いなと」を実感した。一見無駄にみえるものももって行って苦に感じないたくましさがあれば、何でももっていった方が楽しい道中になる。うらやましい限り。サイクリングで心配なのは、天気がいいか悪いか。向い風か追い風か。舗装かじゃりか。飯がうまいかまずいか。何日も雨が続くと、全くみじめで帰りたくなる。そんな時は明日晴れることを祈りつつ、旅のつらさと孤独に耐える。が、仲間がいっしょなら結構雨でも時をしのげる。海に飛び込んでのびる厚野。絵に書いに表。楽しい牛。親切なおばさん。たのもしい仲間。のんびり行こう が私の辿りついたとも残されたともいえるサイクリングでありました。

オレとサイクリング

西原正人

金谷に書くのか、書かないのか、はっきりせい。」と言われたので、ここに体験の一部を書いてみたいと思う。オレにとっては、4年間のしめくくりでもあるし、思い出にふけりながら書いてみたいと思う。

高校時代にオレは友だちに

「オレは、自転車で日本一周してやるぜ」

と、言ったことがある。今から考えるとあの頃は若さがあったものである。

大学に入るとしばらくぶらぶらと遊んでいたが、サイクリング部のポスターを見たとき高校時代に、自分が口走ったあの言葉を思い出したのである。

「よし！いっちょうやってみっかな」

というわけで入部。

早いものである。あれからもう4年間たってしまったのか……

大山に登ったのは、オレが1年のときの夏合宿である。この頃から日比野とのくされ縁が始まっていたのかと思うと、身の毛のよだつ思いである。

我々は、宮島を出発して、中国山地を横切り、山陰を東進、天の橋立までの行程であった。その行程にあの大山が含まれていたのである。

頂をあげると、アスファルトの道がまっす

「ぐに続いている。「登り道」というものは、カーブがたくさんなければいかんと思う。誰もが経験があると思うが、

「あのカーブを曲がると、下り坂だろう。」

という期待が、我々サイクリストにはあるのである。

そのはかない期待などは、みごとに打ち砕く大山の登り道であった。

お日様は、かんかん と照りつけて 色白の僕ちゃんのお肌をちりちりと焼いちゃんだからやんなちゃうわ。

と、その時オレは思った。そしてしだいにオレは疑問をもちはじめたのである。「オレはなんでこんなことをやらなきゃならんのだ。」

「こんな坂道、車で登りゃ、リー千一発じゃねえか。」しかし その横をクーラーをたっぷりきかせたような車が通るたびに、

「オレはあいんだぜ！ オメーうみたいにひ弱じゃねーぜ。」「ヤルゼ！オレは。」

というわけで、車に対して非常なる敵意をもちながら、ペダルをこぎつづけるのである。とにかく登っている間はこれの繰り返してあった。

「大山寺はまだか。」

ついにオレの頭の中にはこの言葉が浮んできた。

この種の言葉というものはけっして考えるものではない。これが出てくると、あせりと絶望感がおそってきて精神的にまいってしまうものである。

しかし、その時のオレにそんな心理学の勉強をしている暇はなかった。顔をあげるとあいか

めらず アスファルトの道がまっすぐに続いている。こうなれば恥も外聞もなしに、道端に大の字になってぶったおれてやっかなと思う。

しかし、……

ここまで登ってきて、ここでやめてしまっては意味がなくなってしまう。

走った。ただひたすら走った。ハシッタというよりも、ハッタと言っておこう。もうまめりの事も気にならなくなった。これも気にならなくなった。というのは誤りで、気にしている余裕がなくなったのである。

どのくらいペダルをこぎ続けていたのだろう。時間的な感覚はあまりないが、とにかく気が遠くなるほど長い時間であった。

ふっとペダルが軽くなった。顔をあげると、

あのアスファルトの道ではなく、売店や寺の屋根のようなものが見える。もしや……

そうだ。ついに着いたんだ。

やったー――あー!

大山寺に着いたのである。

現金なものではあるが、今まで頭の中にあった混乱状態はうそのように消え、すがすがしいと言うか、満足感というか、何とも形容のできない感情が脳の中にひろがってくるような気持ちであった。このときの感激は皆にもわかってもらえると思う。

仲間で売店に入り、氷いちごをたのんだ。このときに食べた 氷ほどおいしいものはないと今でも思っている。

それから4年間、合宿も何回か参加したが、

「すべて オレにとってはいい想い出として残っ」
ている。
最後に、
オレは、サイクリング部に入って本当によかった。
後輩の皆も 悔いの残らない学生生活を送るためにも、想い出に残るような、良い旅行をしていただきたいと思う。

(終)

パート・タイム

杉浦充幸

PART I

荒涼たる原野の中を一直線に一筋の道が通っている。時として吹き荒れる風は容赦なく我々を沈黙させる。今、我々はあたかも夢遊病者のごとく原野の中をさまよっている。果たして、この先はどこまで続いているのだろう。三百六十度見渡す限りの地平線に一抹の不安は隠せない。地球の地肌のような、このデコボコ道だけが我々の頼りである。

やがて原野のオアシスなる原生花園に着く。だがしかし、花が咲き乱れ、蝶が乱れ舞う、あのディスカバー・ジャパンごとき世界を想像した我々の期待は見事に裏返された。花園にして花園にあらず。時、八月。この地においては、もはや季節はずれ。頭上では我々をあざ笑うかのように陽が照っている。何もない草原たる原生花園をあとに、我々は再び原野の中の一本道を進む。

遠くに海が見えて来た。日本海だ。砂浜に自転車を倒し、我々は海を眺めた。あたりには人っ子一人いない。荒れ果てた番屋だけが潮風にさらされている。海の向こうには利尻島が見える。一名、利尻富士。あたかも富士山が海からぽっかりと頭を出しているようだ。海が荒い。――寒く波立つ日本海の遠く彼方に利尻は浮ぶ――。我々はしばらく海を眺めていた。

そして再び自転車にまたがり、日本最北端

に向かって我々の旅は続く。

―北海道・サロベツ原野―

＊　＊　＊　＊　＊　＊

PART Ⅱ

重そうな鉄の扉が開かれる。愛車と共に我々は中へ入って行った。中にも扉がある。バタンと後の扉が締まった。我々は上下四方鉄板で囲まれた大きな箱の中に閉じ込められた。すると、ギーと音を立てて密室は動き出した。地下へ向かってもぐっている。一体どの位、地底深くもぐるのだろう。閉じされた空間の中で不安と期待とが交錯し、我々は沈黙のままでいる。数分時間が過ぎた。もう百㎞はもぐ。ただろうか。まだもぐる。

やがてガタンと音を立てて停止した。目の前の扉がスーと開く。やや広い何もない明るい空間が我々の眼に映った。慎重かつ速かに愛車をエレベーターから降す。窓一つない地下室というのは何となく無気味である。あたりを見渡すと一方向にトンネルが通じている。我々は愛車にまたがり、そのトンネルの中へ入って行った。

中は薄暗く、奥は真っ暗で何も見えない。不思議だ！ペダルを踏まないのに自然と前へ進んで行く。まるでトンネルの奥深くに吸い込まれて行くようだ。と、そこでハタと気が付いた。何の車はない、自然と前へ進んで行くのはトンネルが坂になっているだけの事である。あたかも吸い込まれている錯覚に陥っ

てしまった。それにしても、一体どこまでこのトンネルは続いているのだろうか。

我々は今、海底下を走っているのであった。

――関門トンネル――

＊　＊　＊　＊　＊　＊

PART Ⅲ

熱くハンドルを握る手の甲にヒンヤリと冷たいものを感じた。雨だ。とうとう降って来たか。急がねばならない。仲間はもうとっくに先へ行ってしまった。独りだ。だが、峠道はきつい。顔を歪めて黙々とペダルをこぐ。

やがて雨は本降りになってしまった。しかし休むわけにはいかない。ただでさえ進みにくいジャリ道が雨に濡れてさらに悪路となる。おまけに、流れ出る汗と降りしきる雨が容赦なく私の体温を奪う。つらい。やはり梅雨時に来たのは失敗だったか。ふと、心の中にむなしさが横切る。孤独だ。だがしかし、重いペダルはいつも私に教える。自然と自分との戦いだと……。

すさみゆく吐息に限界を感じる。もうだめだ、休もう。木の下で暫しの休息を取る。聞こえるのは雨音だけ。迫りくる自然の中で雨の音とそれによってすべてをかき消された静寂を感じる。雨に打たれ、いっさいの邪念を払う。無、無、無、……。

ハッと気付き現実に戻ると、愛車と共にびしょ濡れだ。さあ急ごう。峠では仲間が首を長くして待っている。もし雨が上がれば峠か

らは富士山が見える筈だ。さあ行こう。身を引き締め、そして再び黙々とペダルをこいで行った。ただ独り、雨の降る侘びしい山間の峠道を……。

――山梨・木賊峠――

＊　＊　＊　＊　＊　＊

PART Ⅳ

「どっから来たんかい。」

ここ川浦という小さな部落でこれから峠を目指そうと暫しの休息を取っていると、うしろの方から杖を突きながら一人のおばあさんが歩いて来た。

「うちでお茶でも飲んできなせえ。」

「はい、どうも。」

せっかくなのでお邪魔することにした。田舎の古ぼけたその農家に入いると、中は薄暗く年期が感じられる。

「昔は女工さんがよく来たもんだ。」

ここは昔は旅籠をしていて、峠を越えてのあの女工哀史をお茶をすすりながら話してくれた。しかし、今はその面影はなく小鳥のさえずる静かでかさな山村にしかすぎない。

「どうもごちそうさまでした。」

爽やかな秋空を見上げ、私は走り出した。

――野麦街道――

LAST

「あっ！御岳が見えない。」……ガク。

その日は雲り空であった。

――木曽・地蔵峠――

雑感

成田浩樹

最近、運動不足・煙草の吸いすぎのためか、動悸・息ぎれが激しい。というのは、大げさであるが四年になって研究室へ入って、運動する機会がなく、また自動車を運転するようになってから、歩く機会も少なくなり、足腰が最近とみに弱くなったように感じる。今から思うと、学部の頃「一生懸命水曜日のトレーニングでマラソンをやっていた頃がなつかしい。だから皆さん、トレーニングは毎週出席して、一生懸命頑ばりましょう。

話は変わって、最近のサイクリング部はずいぶん活発な活動をするようになったものである。僕が学部一年の時入部した時、四年生3人、三年生8人、二年生3人、そして我々一年は、杉浦・見勢・鈴木・武石・そして僕を含む5人であった。そしてクラブの活動の中心は3年生で占められ、僕らはそれに従っていた。毎週のトレーニングは行っていたが、月例サイクリングはあまりなく、夏・春の合宿がクラブの親睦の場であった。その頃の部長は、安藤さんと言って、今でいう硬派の、まじめな部長であった。その頃まではサイクリング部といえば、部長は伝統的にクラブ活動に一生懸命で、サイクリングも走ることが楽しいと感じる人達であった。それが、僕が2年の後期になって部長になった頃から、人が言うに、だらけてきたらしい。それを称して、僕が軟弱成田で通っていた。その出所が、二年の春、九州の合宿で僕が一年生を

連れた合宿から来ているらしい。ま、それはそれでいいと思う。僕も言いわけは言わないが、それからのクラブが今までと違う様子を帯びてきたことには、責任を感じている。僕の影響が多少なりとも、後の部長に影響を与えたみたいだ。しかし最近、またもとのようなハードなサイクリング指向になってきたことは、うれしいことである。現在、クラブには、4年生以下、1年生を集めると40人近くの人達がいるが、クラブは人数が多ければ多い程、仲間が増えて楽しいものである。これからも、より一層の発展を望み、かつ期待するものである。

とりとめない文章になってしまったが、題が雑感だから、その点は許してもらいますが、まあ楽しくやって下さい。

この4人のうち、誰が勝つでしょう。

Article 90

御嶋恭司

ロス到着、12時15分。税関にてトゥールロールズ紛失。約1時間半空港を紛失手続きのためさまよう。ラゲッジオフィスで手続をやっと終えるが疲労感増大！ 日本語を忘れた日本人のホテルビジネスマンに会う。その夜彼のホテルに泊る。時差のため、寝不足ぎみ。翌朝 デンバーに発ち、ジャクソンへ行くのであるが デンバーの時間とロスのそれとの差に気がつかなかった。そのためチェックインに遅れたがラッキーなことに最後部の2座席だけがのこっていた。

ジャクソンシティに到着。ジャクソン空港のまわりには、ただ一軒の人家が見えるだけであった。空港で車を拾おうとしてラゲッジサービスの所に座っていた山丘家に「ここからジャクソンシティは、近いかと聞いたところ「近いどころか遠い事が返ってきたので距離を聞いたところなんと21キロである 彼は平然顔でそれを言ってのけた。21キロを近いと言っているのである。これには驚ろいた。この時 アメリカの広大さを知らされたような気がした。工具を失った以上自転車は、組みたてられない。車で行くしかなかった。ちょうど空港に来たビジネスマンにそれを交渉しようとした時 遠くの道をこちらへ向ってバイカーが2人来るのが見えるのである。彼らは、空港に水を求めて来たのである。彼らに行く先を聞いたところ、ジャクソンシティに行くという。工具をかしてもらい自転車を組み上げた。それを

見ていた彼らは、シートピンのクイックと二分式のマッドガードに驚ろいていた。二人はビルとチャックという名前である。ビルは、ハイスクールの数学の先生であり、ミシガン州立大学で数学を学び、二人の日本人教授になったとおっていた。そういうわけか、私たちにひじょうに親切にしてくれた。チャックは、セールスマンである。彼の英語は、ひじょうにくせがあり、はっきりわからない、よってあまり話をしなかった。口を出るとき日本人には、ワイオミングでは、会えまいと思っていたがジャクソンシティの人口で日本人のバイカーに会った。和夫という名前でチームリーダーである。世界各地を自転車で走ってきた人でバイカーとしてテレビ、新聞に出た人である。アメリカで走るということは、ひじょうにのどかわくことである。なお和夫は日本語以外に、3カ国語をペラペラのペラである。

集合場所であるスキーヒュッテに着く。キーパーと事故者2人がいた。その晩、カントリーバーで楽しくジェイ、チャック、ビルと夫に過ごした。次の晩、またバーに行ったら、ミストゥレストに、17歳以下は、入ったらだめ」と言われてしまった。その次の晩チームのメンバーが、全員そろった。リーダーが、チャック、ブラウン（アリゾナ大学講士 前述のチャックとは別人）である。メンバーは、スタン、ビル、レイ、ドン、ジャック、エド、私たち二人である。翌日、グランドティートンまで往復80キロを走る、帰りに大雨にあった。

その次の日の朝6時ユルターベイに向かい出発。

ジャクソンレイクダムまでエドといしょに走った。彼は、疲れたようだった。コルターベイの眺は、劇を見て楽しんだ。ガキが空手ごこをして遊ぶところをよく見かけた。

翌朝、6時、非常に寒むかった。手袋を持って来なかったので、手が凍りつきそうであった。スタンこいっしょにずうと走った。彼は、宇宙衛星の技師である。彼は、女に自が ない。少しかわいいんがいると「Pretty girl」とすぐ口走るのである。ユーモアもあり、ウィッズダムで寝る前に彼が茶を飲んだのだった。それを私が見ていると。彼は、自分の股のあたりを指さして言ったのだった。

「Get bigger」

オールドフェイスフルに到着。そこは、スプリングがたくさんあり、その一つにオールドフェイスフルというのがある。それは、30と90分おきに、地熱により地下水をふき出す。その高さは、30～50mである。それを待ちまわりに座る人々はほんとうに Funny である。そこのキャビンの食堂は、実によかった。食べ放題、飲み放題であった。翌日、レイ、ドン、ビルは、フロウティングに出かけた。残りの人は、エスティマの運転してきたジャックの車でイエローストーンレイク周辺をドライブした。実に眠むかった。

アースクェイクパークまでの道は、「ワンウェイ」であった。目的地まで二通り過ぎる町は、二、三であるあるが、ビル、レイ、ドンの三人は、町につくと、バーに入ってビールを飲んでいる。バーの前の自転車を、見つけて、

私も入っていた。ビルにおごってもらった。ビルは、私たち二人を除いたチームでただ一人のスモーカーである。彼は私に会うと「How are you doing, Joe?」と言うのである。Joeというのは、チャックが私につけたショートネームである。

ベージニアシティまでの道は、「Not easy」山越えする前の町を走っていたら。「おーい」と声がした。私は、日本語が聞こえたような気がしたので止まった。そして後を見た。高価なポルシェから降りて来たのは、なんと和夫であった。再会できるとは、思ってもみなかった。彼は、走りよってきてミズーラのことを知らせてくれた。

その後が大変問題のある坂である。頂上までにある日陰は、道のそばにただ一本ある木が作るものだけである。頂上まで坂は、延々と20km続く。日は、照りつける。この坂で陽沢(my partner)がひざをいためた。

ベージニアシティに私はレイといっしょに着いた。いつものようにバーに入ってビールを一杯。隣であったおじいさんとどういうわけか仲良くなりビールをおごってもらったり、ビリヤードをしてあそんだ。そこのバーの女の子が言ったのには、「Is Japan smaller than Montana?」この大国に住んでいて日本を見ることなどうつるのも当然である。おじいさんは、エアメイを経験しているが、日本軍に対して、ぜったいいい言葉はいわなかった。

バージニアシティーでデイブという大工さんとも仲よくなった。彼は、同じ方向へ行くバイカーで、この後、フリスビーなどをしてよく遊んだ。

この後は、広々とした牧場の中を走ることが多く、町の数は、少なく、町の大きさも小さかった。

ウィズダムの町までは、ひじょうに苦しかった。朝6時に出発し、大きな山を2つ越えて昼食を取ったのが、午後3時であり、その町からウィズダムまでが砂利道であった。

Chack got sick. ビールを飲んでキャビンに帰ったら、チャックがベッドに寝てた。いつものようにジョークの多い夜ではなかった。

ディロンの町では、Western Montana College のドミトリーに泊った。この大学の設備には驚いた。まったく大きなどれもの上ならぬものである。Leisure Room でデイブとビリヤードをノーチャージでやって楽しんだ。

ミズーラにて Montana University がある。この大学もすごく設備がいい。学食は、まるで日本のレストランで Leisure Room には、ボーリング場まである。ミズーラの町は、ほんとにいい町である。町で2、3回会った日本人に、はじめて話しかけた時、「あんた、日本人だったの」と返ってきた？。この町で旅も終りである。チャックは、裸足で送ってくれた。デイブは、自転車に乗って両手ばなしで、Good-bye を言ってくれた。

ほんとうにいい旅だった。

――ある日の部誌――

新春第①弾！
恐怖ハニック映画！

ナトーリンク・インフェルノ

［配役］名取組組長　名取名（メイ）…名取氏
鈴木組組長　鈴木鈴…鈴木氏②
名取組部下　小野野小…小野氏
消防士　曽我部部曽夫…曽我部氏
一回休み　…沢木氏

［あらすじ］表向きは土木業である名取組は実は暴力組織であった。組長名取はタバコのすいすぎで歯が黒くなってしまった。スタイルを気にする名取は、ハニックという歯を白くする薬を買いに行く。しかしその店はカタキである、鈴木組が支配していた。鈴木組は名取に、ハニックとみせかけ、違う薬を売った。そのため名取は歯がとけてなくなってしまった。部下の小野が鈴木組の陰謀をキャッチし名取に伝える。力のない名取組は、鈴木組の新築作業を請け負い、ガタガタな家を作ってしまう。そして、放火までしてしまうのである。家から逃げられなくなった鈴木鈴を、勇敢な曽我部部曽夫消防士が助ける一大パニックハニック映画である。

［上映時間］39分

［配給］TITCCTO　　6月公開予定

［脚色］NF CO.LTD.

☆編集後記

なんやかんやと云っているうちに、51年度の部誌がこうして日の目を見ることになりました。昨年の部誌は、どちらかというと"記録"という点に重点がおかれたものになったのですが、部員からこの点に不満が生じ、今年は昨年とはひと味違ったものにしようと、みんなでいろいろ話しあいました。

その結果、今年は次の二つの方針で部誌を編集することになりました。11月中旬のことです。

①部員全員が書く。

②テーマは自由。そしてツーリングについて書く場合、細かな記録にはとらわれず、自由に書く。(ツーリング記録というレポートを、別につくり、記録についてはそちらにまとめることにしました。)

以来、筆無精の部員たちをせきたてながら、オミ新館ではモグリとして、小島・原西先輩の研究室ではイリーローとしてコピーしたのが、二000余枚……。早く専用のコピー機が欲しいものです。

メンドクサと思いつつ編集をしてきましたが、こうして完成して一冊にまとまった姿をみると、なんといっても嬉しいものです。

部誌はクラブの"顔"であり、その時点でのクラブの姿を反映したものだと思います。まだまだ改めるべき点があり、もっともっと良い部誌ができるはずです。来年の書記の方、頑張って下さい。

(書記 金谷)

Top and Low

——昭和51年度東京工業大学サイクリング部部誌——

編集者　金谷健，栗原和明，佐藤恭輔
鈴木道夫

発行　昭和52年1月26日（水）